

「するとだ……まだ其の踏切を越えて腕車を捜したッてまでにも行かず……其奴の風采なんぞ悉しく乗出して聞くのがあるから、私は薄暗がりの中だ。判然とはしないけれど、臙氣に、まあ、見ただけをね、喋舌つてる中に、其の……何だ。」

向う角の女郎屋の三階の隅に、眞暗な空へ、切つて嵌めて、裾をぼかしたやうに部屋へ蚊帳を釣つて、寂然と寝て居るのが、野原の辻堂に紙帳でも掛けた風で、恐しくさびれたものだ、と言つたつけ。

其の何だよ……

蚊帳の前へ。」

「一寸、」と梅次は、痙攣るばかり目を睜つて膝をすらしした。

「大丈夫、大丈夫、」

と民彌は又僅に笑を含みつつ、

「仲の町越しに、此方の二階から見えるんだから、丈が……然うさ、人にして二尺ばかり、一寸法師ツか無いけれど、何、普通で、離れて居るから小さいんだらう。……婆さんが一人。

大きな蜘蛛が下りたやうに、行燈の前へ、もそりと出て、蚊帳の前をスーと通る。……擦れ擦れに見えたけれども、縁側を歩行いたらう。が、宙を行くやうだ。其も、黒雲の中にある、青田

のへりでも傳ふツて形でね。

京町の角の方から、水道尻の方へ、頓て、暗い處へ入つて隠れたのは、障子の陰か、戸袋の背後に成つたらしい。

遣手です、風が、大引前を見廻つたらう。

其が見えると、鐵棒が遠くを廻つた。……カラ、……カン、……何だか妙だね、あの、何うか言ふんだつけ。」

「チヤン、カン、チヤンカン……ですか。」と民彌の顔を瞻めながら、軽く火箸を動かしたが、鐵瓶にカタンと當つた。

「あ、」

と言つて、はつと息して、

「あ、吃驚した。」

「ト今度は、其の音に、づつと引着けられて、廊中の暗い處、暗い處へ、連れて歩行くか、と思ふばかり。」

「話してゐる私も黙れば、聞いて居る人たちも、びつたり静まる……」

と遣手らしい三階の婆々の影が、蚊帳の前を眞暗な空の高い處で見えなくなる、——と頓てだ。二三度続け様に、水道尻居まはりの屋根近な、低い處で、鴉が啼いた。夜鳥も大引けの暗夜だらう、可厭な聲と云つたら。

すた／＼とけた、ましい出入りの登音、四ツ五ツ入亂れて、驅出す……馳込むと云つたやうに、然も、なすりつけたやうに、滅入つて、寮の門が慌しい。

私の袂を、じつと引張つて、

(あれ、照吉姉さんが亡くなるんぢやなくツて)ツて、少し震へながらお三輪が言ふと、

(引潮時だね丁度……)と溜息をしたは、油繪の額縁を拵へる職人風の鐵拐な人で、中での年寄だつた。

婦人の一人が、

(姉さん、姉さん、)

と、お三輪を、丁度其の時だつた、呼んだのが、何故か、氣が移つて、今息を引取らうと云ふ……照吉の枕許に着いて居て言ふやうな、恚う堅く成つた沈んだ聲だつた。

(は、い、い、)

と此も幽にね。

濱谷ツて人だ、其の婦人は、お蘭さんと云ふのが、

(内にお婆さんはおいでですか。)

と聞くぢやないか。

「まあ、」と梅次は呼吸を引く。

民彌は靜に煙管を置いて、

「お才さんだつて、年ぢやあるが、まだ何うして、姉えで通る、……婆さんと云ふ見當では無い。

皆、其に、其だと顔は知つて居る。

女中がはりに送迎をして居る、前に、それ、柳橋の藝者だつたと云ふ、……耳の遠い、ぼんやりした、何とか云ふ。」

「お組さん、」

「粹な年増だ、可哀相に。最う病氣であんなに成つては居るが……だつて白髪の役ぢや無い。

(否、お婆さんは居ませんの。)

(然う……)

と婦人が言つたつけ。附着くやうにして、床の間の傍正面にね、丸窓を背負つて坐つて居た、

二人、背後が突抜けに階子段の大きな穴だ。

其の二人、最う一人のが明座ツて矢張婦人で、今のを聞くと、二言ばかり、二人で密々と言つたが否や、手を引張合つた様子で、……尤も暗くつて能くは分らないが。而してスーと立つて、私の背後へ、足袋の白いのが颯と通つて、香水の薫が消えるやうに、次の四疊を早足で以て、トントンと階下へ下りた。

又、皆、黙つたつけ。尤も誰が何をして、何處に居るんだか、暗いから分らない。

少時、袂の重かつたのは、お三輪が確乎持つてゐるらしい。

急にあがつて来ないだらう。

(階下ぢや起きて居るかい。)

(起きてるわ、あの、だけど、才ちゃんも照吉さんの許へ一寸行つてるかも知れなくつてよ。)

(何は、何だつけ。)

(お組さん、……え、火鉢の許に居てよ。でも、最うあの通りでせう、坐眠をして居るかも知れないわ。)

(三輪ちゃんか、一寸見てあげてくれないか、はゞかりが分らないのかも知れないぜ。)&一人氣を着けた。

(え、)

てツたが、最う可恐くツて一人では立てません。

最う一ツ、袂が重く成つて、

(二所に……兄さん、)

と耳の許へ口をつける……頬邊が冷りとするわね、鬢の毛で。其だけ内證のつもりだらうが、

あの娘だもの、皆、聞えるよ。

(一寸、失禮。)

(奥方に言ひつけますぜ。)&誰か笑つた、が、其も陰氣さ。

十八

「暗い階子をすつと抜ける、と階下は電燈だ、お三輪は颯と美しい。

見ると、何うです……二階から下して来て、足の踏場も無かつた、食物、道具なんか、掃いたやうに綺麗に片附いて、門を閉めた。節穴へ明が漏れて、古いから森のやう、下した蔀を背後にして、上框の、あの……客受けの六疊の真中處へ、二人、お太鼓の帯で行儀よく、まるで色紙へ乗つたやうでね、ける、かな、と端然と坐つてると、お組が、精々氣を利かしたつもりか何かで、

お茶臺に載つかつて、丁とお茶が其の前へ二つ並んで居ます……
お才さんは見えなかつた。

處が、お組があれだらう。男なら、骨でなり、勘でなり、其處は跋も合はせようが、何の事は無い、松葉ヶ谷の尼寺へ、振袖の若衆が二人、と云ふ、てんで見當の着かないお客に、不意に二階から下りて坐られたんだから、ヤ、妙な顔で、きよんとして……

次の茶の室から、敷居際まで、擦出して、煙草盆にね、一つ火を入れたのを前に置いて、御丁寧に、最う一つ火入に火を入れて居る處ぢや無いか。

座蒲團は夏冬とも不殘二階、長火鉢の前の、其奴は出せず失禮と、……煙草盆を揃へて出した上へ、團扇を二本の、最う些と其のまゝにして置いたら、お年玉の手拭の残つたのを、上包みのまゝ、持つて出て、別々に差出さうと云ふ様子で居る。

さあ、お三輪の顔を見ると、嬉しさうに雙方を見較べて、吻と一呼吸を吐いた様子。
(才ちゃんは、)

とお三輪が、調子高に、直ぐに聞くと、前へ二つばかりゆつくりと、頷き……

(姉さんは、一寸照吉さんの様子を見に……あの、三輪ちゃん。)

と戸棚へ目を遣つて、手で圓いものをちらりと拵へたのは、菓子鉢へ何か？の暗號。

あ、病氣に、あはれ、耳も、聲も、江戸の張さへ抜けた状態は、糊を賣るよりいぢらしい。

「お三輪が、笑止さうに、

(はゞかりへおいでなすつたのよ。)

お組は黙つて頭を振るのさ。否、と言ふんだ。然うすると、成程二人は、最初から其處へ坐り込んだものらしい。

(此方へ入らつしやいな。)と其の一人が、お三輪を見て可懐しさうに聲を懸ける。

(佐川さん、)

と太く疲れたらしく、弱々と其の一人が、尤も夜更しの所爲もあらう、髪もばらつく、顔色も沈んで居る。

(何うしたんです。)と、丁度可い、其の煙草盆を一つ引摺つて、二人の前へ行つて、中腰に、敷島を一本。さあ、恠う成ると、多勢の中から抜出したので、常よりは氣が置けない。

(頭痛でもなさるんですか、お心持が悪かつたら、蔭へ枕を出させませうか。)

(否、別に……)

(御無理をなすつちや不可ません。何だかお顔の色が悪い。)

(然うですかね。)とお蘭さんが、片頬を殺ぐやうに手を當てる。

(ねえ、貴女、お話しませう。)

(でも……)

(ですがね、)

とちら／＼と目くばせが閃めく、——言はうか、言ふまいかッて素振だらう。
聞かすには置かれぬ。

(何です、何です)

と肩を真中へ挟むやうにして、私が寄る、と何か内證の事とでも思つたらう、ぼけて居ても、其處は育ちだ。お組が、あの娘に目で知らせて、二人とも半分閉めた障子の蔭へ。ト長火鉢のさしの向ひに、結綿と圓鬚が、ぼつと映つて、火箸が、よろ／＼として、鐵瓶がぼつかり大きい。お種さんが小さな聲で、

(今、二階から來らつしやりがけに、物干の處で、)

と些し身を窘めて、一層低く、

(何か御覽なさはりはしませんか。)
私は悚然とした。]

十九

「が、故と自若として、

(何を、どんなものです。)つて聞返したけれど、……今の一言で大抵分つた、婆々が居た、と言ふんだらう。

「可厭」と梅次は色を變へた。

「大丈夫、まあ、お聞き、……と云ふものは——内にお婆さんは居ませんか——ッて先刻お三輪に聞いたから。……

果然、然うだ。

(何ですか、お婆さんらしい年寄が、貴下、物干から覗いて居ますよ。)

と又一倍滅入つた聲して、お蘭さんが言ふのを、お種さんが取繕ふやうに、

(氣の所爲かも知れませんが、多分然うでせうよ……)

(否、確なの、佐川さん、其でね、唯顔を出して覗くんぢやありません。梟見たやうに、膝を立てて、蹲んで居て、窓の敷居の上まで、物干の板から密と出たり、入つたり、)

(あ、可厭だ。)

と言つて、揃つて二人、ぶる／＼と掃消すやうに袖を振るんだ。

其の人たちより、私の方が堪りません。で無くつてさへ、蚊帳の前を傳はつた形が、晝間の闇がり坂のに肖て居て堪らない處だもの、……烏は啼く……と真ぐにあの、寮の門で騒いだらう。氣にしたら、何うして、突然ポンプでも打撒けたいくらゐな處だ。

(何時から?……)

(つい今しがたから。)

(全體前から、あの物干の窓が氣に成つてしやうがなかつたんですよ。……時々、電車のですかね、電ですか、薄い蒼いのが、眞暗な空へ、ぼつと映しますとね、黄色くなつて、大きな森が出て、而して、五重の塔の突尖が見えるんですよ……上野でせうか、天竺でせうか、何にしても餘程遠くで、方角が分りませんほど、私たちが見て凄かつたんです。其の窓に居るんですもの。)

(最つとお言ひなさいよ。)

(何です。)

(可厭だ、私は、)

(最つとは?)

(貴女おつしやいよ。)

と譲合つた。トお種さんが、障のお三輪にも秘したさうに、

(頭にね、何ですか、手拭のやうなものを、扁たく疊んで載せて居るものなんです。貴下がお話しの通りなの、……佐川さん。)

私は口が利けなかつた。——無暗とね、火入へ巻蓑をこすり着けた。

お三輪の影が、火鉢を越して、震へながら、結綿が圓鬚に附着いて、耳の傍で、

(お組さん、何處のか、お婆さんは、内へ入つて來なくツて?)

(お婆さん……)

とぼやけた聲。

(大きな聲をおしでないよ。)

と焦つたさうにたしなめると、大きく合點々々をしながら、

(來ましたよ。)

ときよとんととして、仰向いて、鐵瓶を撫でて澄まして言ふんだ。

「來たの、」

と梅次が蘇生つた顔に成る。

「三人が入亂れて、其方へ膝を向けた。

御注進の意氣込みで、お三輪も、はらりと此方へ立つて、とんと坐つて、せい／＼言つて、
(来たんですつて。一寸、何處の人。)

と、でも、矢張、内證で言つた。

胸から半分、障子の外へ、お組が、皆が、油へ水をさすやうな澄ました細面の顔を出して、
(え、一人お見えに成りましたすよ。)

(何時さ?)

(今しがた、可厭な鴉が泣きましたらう……)

いや、最う其には及ばぬものは又意地悪く聞える、と見える。

(照吉さんの様子を見に、お才はんが驅出して行きなすつた、門を開放したまんまでさ。)
皆が振向いて門を見たんだ。」

二十

「其の癖門の戸は閉つて居る。土間が狭いから、下駄が一杯、杖、洋傘も一束。大勢餘り隙だら、歩行出したさうに、もぞり／＼籐表の目や鼻緒なんぞ、むく／＼動く。

此の人数が、二階に立籠る、と思ふのに、其の又静さと言つたら無い。

お組が其の儀は心得た、と云ふ顔で、

(後で閉めたんでございますがね、三輪ちゃん、お才はんが粗々かしく、はあ、)

と私達を見て莞爾しながら、

(驅出して行きなすつた、直き後でございますよ。入違ひぐらるに、お年寄が一人、其の隅こから、扁平たいやうな顔を出して覗いたんでございますよ。

何でも、其處で、お上さんに聞いて来た、と然う言ひなすつたやうでしたつけ……すたく／＼二階へお上りでございました。)

さ、耳の疎いと云ふものは。

(何處の人よ、)

とお三輪が擦寄つて、急込んで聞く。

(何處のお婆さんですか。)

(お婆さんなの、一寸……)

私たちが訊ねたい意は、お三輪もよく知つて居る。闇がり坂以來、氣に成る其が、爺とも婆とも判別が着かんぢやないか。

(でせうよ、はあ、……餘程の年紀ですから。)

(否、年寄だつてね、お爺さんもお婆さんもありますッさ。)

(其がね、其ですがね三輪ちゃん。)

と頭を掉つて、

(何方だかよく分りません。背の低い、色の黄色蒼い、突張つた、硝子で張つたやうに照々した、艶の可い、其の癖、随分よぼよぼして……はあ、手拭を疊んで、べつたり被つて。)

女たちは、お三輪と顔を見合はせた。

(其ですが、何うかしましたか。)

(何うも慥うもなくつてよ……)とお三輪は情ない聲を出す。

(不可せんでしたかねえ。私は矢張會に來らした方か、と思つて。)

……成程な、

と民彌は言ひ掛けて苦笑した。

「會へ來らしたに相違はない。

(今時分來る人があつて、お組さん。最う二時半だわ。)

(ですがね、此の土地ですし……一寸、御散歩にでもお出掛けなすつたのが、歸つて見えたかと

も思ひましたし……お怪の話をする、老人は居無いかつて、誰方かお才はんはんに話しをしておいでだつたし、何處か呼ばれて來たのかとも、後でね、考へた事です。否ね、そんな汚い服装ぢやありません。茶がかつた鼠色の、何ですか無地もので、皺のないのを着てでした。

けれども、顔で覗いて其の土間へお入なすつた時は、背後向きでね、草履でせう、穿物を脱いだのを、突然懷中へお入れなさるから、もし、ツて留めたんですが、聞かぬ振で、而して何です、其のまんま後びつしやりに、するツかするツか其處を通つて、)

と言はれた時は、揃つて疊の膝を摺らした。

(此の階子段の下から、向直つてのつそり、何だか不躰らしい、屹と田舎のお婆さんだらうと思ひました。いけ強情な、意地の悪い、高慢なねえ、其の癖しよなくして、何うでせう、可恐い裾長で、……地へ引摺るんでございませうよ。

裾端折を、ぐるりと揚げて、一寸帯の處へ挟んだんですがねえ、何ですか、大きな尻尾を捲いたやうな、變な、其は様子なんです。……)

おや、無面目だよ、人の内へ、穿物を懷へ入れて、裾端折のまんま、まあ、随分なのが御連中の中に、と然う思つて居たんですがね、へい、まぐれものなんでございますかい。)

わななく震へて聞いて居たつけ、堪らなく成つた、と見えてお三輪は私に縋り着いた。

否、お前も、可恐ながら事は無い。……
最う、其處までに成ると、さすがにもの分つた姉さんたちだ、お蘭さんもお種さんも、言合はせたやうに。私にも分つた。言出して見ると皆同一。……

二十一

「茶番さ。」

「まあ！」

「誰か趣向をしたんだね、……尤も、昨夜の會は、最初から百物語に、白装束や打散らし髪で人を怯かすのは大人氣無い、素にしよう。——其で、電燈だつて消さないつもりで居たんだから。けれども、其の、爲ないと云ふ約束の裏を行くのも趣向だらう。集つた中にや、随分娑婆氣なものも少く無い。屹と誰かが言合はせて、人を頼んだか、其とも自から化けたか、暗い中から密と摺抜ける事は出来たんだ。……夜は更けたし、潮時を見計らつて、……確に其に相違無い。」

ト然う云ふ自分が、事に因ると、茶番の合棒、發頭人と思はれて居るかも知れん。先刻入つたと云ふ怪しい婆々が、今現に二階に居て、傍でも其の姿を見たものがあるとするれば……似たやうなものの事を私が話したんだから。

(誰かの悪戯です。)

(屹と然う。)

と婦人だちも納得した。忽ち雲霧が晴れたやうに、心持も薩張したらう、急に眠氣が除れたやうな氣がした、勇氣は一倍。

怪しからん。鳥の羽に怯かされた、と一の谷に遁込んだが、緋の袴まじりに鶴越えを逆寄せに盛返す……と成ると、おオさんは未だ歸らなかつた。お三輪も、恐いには二階が恐い、が、其のま、耳の疎いのと差對ひちや尙ほ遣切れなかつたか、又袂が重く成つて、附着いて上ります。

其でも、矢張り、物干の窓の前は、私はじめ悚然としたつけ。

ばたくと忙しさうに皆坐つた、舊の處へ。

で、思ひくではあるけれども、各自暗がりの中を、恚う、……不氣味も、好事も、負けない氣も交つて、其の婆々だか、爺々だか、稀有な奴は、と透かした。が居ない……」

梅次が、確めるやうに調子を壓へて、

「居ないの、」

「まあ、お待ち、」

と腕を組んで、胡坐を直して、伸上つて一呼吸した。

「其處で、連中は、と見ると、いや最う散々の爲體。時間が時間だから、ぐつたり疲切つて、向うの縁側へ摺出して、欄干に臂を懸けて、夜風に當つて居るのなどは、まだ確な分度。突臥したんだの、俯向いたんだの、壁で頭を冷してるのもあれば、煙管で額へ突支棒をして、疊へ踏めつたやうなものもある。……夜汽車が更けて美濃と近江の國境、寢覺の里とでも云ふ處を、ぐらぐら揺つて行くやうで、例の、大きな腹だの、瘦せた肩だの、帯だの、胸だの、ばらぐらに成つたのが遠灯で、むらくくと一面に浮いて漾ふ。

(佐川さん、)

と囁くやうに、……幹事だけに、まだ確乎して居た澤岡でね。矢張り私の隣りに坐つたのが、(妙なものをお目に懸けます。)

(え、)

それ、婆々か、と思ふと然うぢや無い。

(縁側の眞中の——あの柱に、凭懸つたのは太田(西洋畫家)さんですがね、横顔を御覽なさい、頬がけつそりして面長で、心持、目許、ね、第一、髪が房々と眞黒に、生際が濃く……灯の映る加減でせう……何う見ても婦人でせう。婦人も、産後か、病上りてつた、あの、凄く蒼白さは、何うです。

もう一人、)

と私の脇の下へ、頭を突込むやうにして、附着いて、低く透かして、

(あれ、ね、床の間の柱に、仰向けに凭れた方は水島(劇評家)さんです。フト口を開きか何か、寝顔はと云ふ態で、額から顔へ、べらりと眞白は手中を懸けなすつた……目鼻も口も何にも無い、のつべらぼう……え、百物語に魔が魅すつて聞いたが、こんな事を言ふんですぜ。)

處が、そんなので無いのが、何時か魅し掛けて居るので氣に成る……

二十一

「然うすると、趣向をしたのは此の人では無いらしい、企謀んだものなら一番懸けに、婆々を見つけてさうなものだから。

(ねえ、此方に最う一つ異體なのは、注連でも張りさうな裸のお腹、……)

(何ぢやね、)と直きに傍だつたので、琴の師匠は聞着けたが、

(否、此方の事で。) 幹事が笑ふと、欠伸まじりで、其れなり、うとく。

(まあ、此は一番正體が知れて居ますが、其でも唐突に見ると吃驚しますぜ。で、矢張りそれ、燭臺の傍に柱に附着いて胡坐でさ。妙に人相形體の變つたのが、三つとも、柱の處ですからね。

私も今しがた敷居際の、仕切の壁の角を、摺出した處ですよ。

何うです、心得て居るから可いやうなもの、其で居ながら變に凄い。氣の弱い方が、轉寢からふつと覺際に、ひよつと一目見たら、吃驚しますぜ。

魔物も矢張り、蛇や蜘蛛なんぞのやうに、鴨居から柱を傳つて入つて來ると見えますな。

（可厭ですね。）
婦人は二人、颯と衣紋を捌いて、櫃子窓の前を離れた、其處にも柱があつたから。

而して、お蘭さんが、

（あ、又……開いて居ますね。）
と言ふんだ。……階下から二階へ歸掛けに、何の茶番が！で、私がぴたり閉めた筈。其の時は勿論、婆々も爺々も見えなかつた、——其の物干の窓が、今の間に、すかり、と慥う、切放したやうに、黒雲立つて開いて居る。

お種さんが、

（憚り様、何うか其處をお閉め下さいまし。）

慥う言つて聲を懸けた。——誰か次の室の、其の窓際に坐つて居るのが見えたんだらう。

お聞き……然うすると……壁腰、——幹事の澤岡が氣にして摺退いたと云ふ、敷居外の柱の根

の處で、

（喃、）

と云ふ聲だ！私は氷を浴びたやうに悚然とした。

（閉い言うて、云はしやれても、喃、埒明かん。閉めれば、其の跡から開けるで、やいの。）

聞くと、筋も身も引釣つた、私は。日暮に谷中の坂で聞いた、と同じぢや無いか。尤も、年寄りには誰某と人を極めない、何の聲も似ては居るが。

其に、言ひ方が、如何にも邪慳に、意地悪く聞えた所爲か、幹事が、對手は知らず、一寸詰るやうに、

（誰が明けます。）

（誰や知らん。）

（はあ、閉める障子を明ける人がありますか。）

（棺の蓋は一度ぢやが、な、障子は幾度でも開けられる、閉てられるがいの。）

（可いから、閉めて下さい、夜が更けて冷えるんですから。）と幹事も不機嫌な調子で言ふ。

（措きましょ。透通いて見えん事は無けれども……障子越は目に雲霧ぢや、覗くにはつきりと能う見えんがいの。）

(誰か、物干から覗くんですかね。)

(彼にも誰にも、大勢、喃。)

(大勢、……誰です、誰です。)

と、幹事もはじめて、恚う逆捻向いて背後を見た。

(誰や言うてもな、殿、殿たちには分らぬ、やいの、形も影も、暗い、暗い、暗い、暗い、見えぬぞ、殿。)

(明るくしよう。)

と幹事も何か急込んで、

(三輪ちゃん、電燈を、電燈を。)

と云つたが、何うして、あの娘が動き得ますか。私の膝に、可哀相に、襟を冷たくして突臥したッ切。

「措きませ、措きませい。無駄な事よ、殿、地獄の火でも呼ばぬ事には、明るくしてかて、殿たちの目に、何が見えよう。……見えたら異事ぢやぞよ、異事ぢやぞよ、の。見えぬで僥倖いの、……一目見たら、やあ、殿、殿たち何う成らうと思はさる。やあ、と口を、ふわ〜と開けるかして、聲が茫とする。」

二十三

「幹事が屹として、

(誰です、お前さんは、)

と聞いた。此の時、睡つて居ない人が一人でもあるとすれば、此は、私はじめ待構へた問だつた。

(私か、私か、……殿。)

と聞返して、

(同じ仲間のものぢやが、やいの。)

(夥間？ 私たちの？)

(誰がや、……誰がや、)

と嘲るやうに二度言つて、

(殿たちの。私と言ふは近間に居る、大勢の、の、其の夥間ぢや、と言ふ事いの。)

(何かね、廓の人かね。)

(然れば、松の森、杉の林、山懐の廓のものぢや。)

(何處から来ました。)

(今日は谷中の下闇から、)

(佐川さん、)

と少し聲高に、幹事が私を呼ぶぢやないか。

私は黙つて居たんだ。

少時して、

(何をしに……)

(「とりあげ」をせうのために、な、殿、「とりあげ」に來たぞ、やいの。)

(嬰兒を産ませるのか。)

(今、無い、丁ど間に合つて「とりあげ」る小兒は無い。)

(そんな、誂へたやうなお産があるものか、お前さん、頼まれて來たんぢや無いのかね。)

(然ればのう、頼まれても來たれど、喃、催促にもまう來たがいの。來たれども、仔細あつて未だ「とりあげ」られぬ。)

(む、まだ産れないのか。)

(何がいの、まだ、死にさらさぬ。)

(死……死なぬとは?)

(京への、京へ、遠くへ行て居る、弟和郎に、一目未練が残るげな。)

幹事はハタと口をつぐんだ。

(其處でぢやがや、姉めが乳の下の鳩落な、蝮指の蒼い爪で、ぎり／＼と錐を揉んで、白い手足をもが／＼と、黒髪を煽つて悶えるのを見て、鳥ならば活きながら、羽毛を撈つた處よの。さて、其だけで歸りがけぢやい、の、殿、其の歸るさに、此へ寄つた。)

(其處に居るのは誰だ。)

と向うの縁側の處から、子爵が聲を懸けた。……私たちは、フト千騎の味方を得たやうに思ふ。

ト此方で澄まして、

(誰でも無いがの。)

(いや、誰でも構はん。が、洒落も申戯も可加減にした方が可いと思ふ。恚う言ふと大人氣ないが、婦人も居てだ。土地つ兒の娘も聞いている……一座をすれば我々の連中だ。悪戯も可いが、餘り言ふ事が残酷過ぎる。……外の事ぢやない。)

弟を愛して、——其が出來得る事でも出來ない事でも、其の身代りに死ぬと云つて覺悟をして居る大病人。現に、夜伽をして、あの通り、灯が其處に見えるぢやないか。

其こそ、何にも知らぬ事だ。些とも差支へは無いやうなものの、あはれな其の婦を、直ぐ向うに苦しませて置いて、香氣さうに、夜通しの此の會さへ、何だか心ないやうな氣がして、私なんぞは鬱いで居るんだ。

仕様もあらうのに、其の病人を材料にして、約束の生命を「とりあげ」に来たが、一目弟を見たらがるから猶豫をした、胸に爪を立てて苦しませたとは何うだ。

聞いちや居られん、餘り残酷で。可加減にして置きなさい、誰だか。

と凛々と云ふ。

聞きも果てずに、

（酷いとは、酷いとは何ぢや、の、何がや、向うの縁側の其の殿、酷いとはいの、やいの、酷いとはいの。）

と疊掛けるやうに、然も平氣な様子。——向うの縁側の其の殿——とは言種が何うだい。」

二十四

「子爵が屹と成つて、坐り直つた様だつけ。

（知らんか、残酷と云ふ事を、知らなけりや聞かせようぢやないか、前へ出ないか、おい、此方

へ入らんか。）

（行かうのう、殿、其の傍へ參らうぢやがの、其處に汚穢いものがあらうがや。早や其が、汚穢うて汚穢うて成らぬ。……退けてくされませ、殿」と言ふんだ。

（汚いもの、何がある。）

（小井に入れた、青梅の紫蘇巻ぢや。や、香も成らぬ、ふつつ。え、胸悪やの、先刻にから。……早く退けしやらぬと、私は嘔吐さう、嘔吐さう、殿。）

茶うけに出て居た甘露梅の事だ。何か、女兒も十二三でなければ手に掛けないと云ふ、其の清淨な梅漬を、汚穢くて成らぬ、嘔吐すと云ふ。

（吐きたければ吐け、何だ。）

（二寸の蚯蚓、三寸の蛇、ぞろ／＼と嘔吐すが怪しうないか。）

（蛇や蚯蚓は構はんが、其處らで食つて來た鱈鮓なんか吐かれては恐縮だ。悪い酒を呷つたらう。佐川さん、其處らにあつたら片附けてお遣んなさい。）

私は密と押遣つて、お三輪と一所に婦人だちを背後へ庇つて、座を開く、と幹事も退いて、私に並んで楯に成る。

次の間かけて、敷居の片隅、大きな壘の穴が開いた。其處を……もくもく、鼠に茶色がかつた朦朧とした形が、フツ、と出て、浮いて、通つた。——

何うやら、臀から前へ、背後向きに入るらしい。

卜前へ被さつた筈だけれども、琴の師匠の裸の腹は矢張り見えた。縁側の柱の元へ、音もなく、子爵に並んだ、と見ると、……氣の所爲だらう、物干の窓は、ワヤ／＼と氣勢立つて、奴が今居たあたりまで、ものの推込んだ様子がある。何爲か、向うの、其の三階の蚊帳が、空へフツと高く成つたやうに思ふ。

丁ど、子爵と其の婆との間に挟まる、柱に凭れた横顔が婦人に見える西洋畫家は、フイと立つて、眞暗な座敷の隅へ姿を消した。眞個に寐入つて居たのでは無かつたらしい。

(残酷と云ふのはね、假にもしろ、そんな、優しい、可憐い、——弟のために身代りに成ると云ふやうな、若い人の生命を「とりあげ」に來たなどと言ふ事なんだ。世の中には、随分、娑婆塞げな、死損ひな。)

と子爵も間近に、よく其の婆々を認めたらう、……當てるやうに、然う言つて、

(邪魔な生命もあるもんだ。そんな奴の胸に爪を立てる方がまだしもだな。)

(其の様な生命は、殿、殿たちの方で言ふげな、……病ほうけた牛、痩せさらばへた馬で、私

等がにも役にも立たぬ。……あはれな、と言ふはの、膏の乗つた肉ぢや、いとしいと言ふはの、薫の良い血ぢやぞや。喃、殿。——此方衆、鳥を殺さしやるに、親子の恩愛を思はつしやるか。獸を殺しますに、兄弟の、身代りの見境があるかいの。魚も蟲も同様での。親があるやら、一粒種やら、可愛い、いとしいの、分隔てをめされますかの。

弱いもの言うたら、しみしんしゃくもさしやらす……毛を捲る、腹を抜く、背を刮く……串刺ぢや、し、びしほぢや。油で煮る、火炎で焼く、活きながら鱈にも刻むげなの、やあ、殿……餓じくばまだしもよ、榮耀ぐひの味醂蒸ぢや。

馴れば、ものよ、何が其を、酷いとも、いとしいとも、不便なとも思はず。——一ツでも繋げる生命を、二羽も三頭も、飽くまでめさる。又食はうとさしやる。

誰も其を咎めはせまい。咎めたとて聞えまい、私も言はぬ、私も其を酷いと言はぬぞ。知らぬからぢや、不便もいとしいも知らねばこそい。——何と、殿、酷い事知らぬものは、何と殿、殿たちにも結構に、重寶にあらうが、やいの、のう、殿。)

(何とでも言へ、對手にも成らん。其でも何か、然う言ふものは人間か。)
と吐出すやうに子爵が言つた。

「ト其奴が薄笑ひをしたやうで、

「何ぢや、や、人間らしく無いと言ふか。誰が人間に成らうと云うた。殿たち、人間が然ほど豪
いか、へ、へ、へ、へ」

とさげすんで、

（此の世のなかはの、人間ばかりのもので無い。私等が國はの、——殿、殿たちが、目の及ばぬ
處、耳に聞えぬ處、心の通はぬ處、——廣大な國ぢやぞの。

殿たちの空を飛ぶ鳥は、私等が足の下を這廻る。水底の魚が天翔ける。……烏帽子を被つた鼠、
素袍を着た猿、帳面つける狐も居る、籠を炊く犬も居る、颯が米舂く、蚯蚓が歌ふ、蛇が踊る、

……や、面白い世界ぢやと言うて、殿たちがものとは較べられぬ。

何——不自由とは思はねども、唯のう、殿たち、人間が無いに因つて、時々來ては攫へて行く

……老若男女の區別は無い。釣針にかつた勝負ぢや、緑の髪も、白髪も、顔はいろ／＼の木偶
の坊。孫等に人形の土産ぢやがの、や、殿。殿たち人間の人は、私等が國の玩弄物ぢやがの。
身代りに成る美しい婦などは、白衣を着せて雛にせう。芋鼓の柱で突立たせて、やの、珠數の玉

を胸に掛けさせ、

いや、最う聞くに堪へん。

（まあ、面を取れ、眞面目に話す。）と子爵が憤つたやうに言ふ。

（面、）

（面だ。）

面だ、面だ、と囁く聲が、其處此處に、ひそ／＼聞えた。眠らずに居た連中には、残らず面に
見えたらしい。

成程、然う言へば、端近へ出てから、例の灯の映る、其の扁平い、むくんだ、が瓜核と云つた
顔は、蒼黄色に、すべ／＼と、皺が無く、艶があつて、皮一重曇つた硝子のやうに透過つて、目
が穴に、窪んで、掘つて、眉が無い。而して、唇の色が黒い。氣が着くと、ものを云ふ時も、奴、
薄笑をする時も、宛然彫刻けたもののやうで静としたツ切、口も頬もビクとも動かぬ。眉……眉
はぬつぺりとして跡も無い、而して、手拭を疊んだらしいものを、額下りに、べたん、と頭へ載
せて居るんだ。

（いや、／＼、）

と目鼻の動かぬ首を振つて、

(除るまい、除らぬは慈悲ぢや。此の中には、喃、晝を描き彫刻をする人もある、其の美しいものは、私等が國から、遠く指す花盛りや、散らすは惜しいに因つて、故と除らぬぞ！……何が、氣の弱い此方たちが、恚うして人間の面を被つて居ればこそ、の、私が顔を暴露いたら、さて、一堪りもなう、髯の生えた玩弄物に化らうが。)

(灯を點けよう、何しろ。)

と、幹事が今は蹠踏けながら手探りで立たうとする。子爵が留めて、

(お待ちなさい。串戯も嵩じると、拔差しが出来なく成る。誰か知らんが、悪戯が些と過ぎます。面は内證で取るが可い、今の内なら些とも分らん、電燈を點けてからは消え憎く成るだらう。)

子爵は何處までも茶番だ、と信するらしい。

……後で聞くと、中には、對方を拵へて應答をする、子爵其の人が、悪戯をして居るんだ、と思つたのもあつたんだ。

(明るさ、暗さの差別は無いが、の、の、殿、私がせう事、其をせねば、日が出ましても消えはせぬが。)

(可、何をしに來たんだ、此處へ。……まあ、假に其方が言ふ通りのものだとすると。)

(然れば、然ればの、殿。……)

と又落着いたやうに、ぐたりと胸を折つた、蹲つた形が挫けて見えて、

(身代りが、——其の儀で、やいの、の、殿、まだ「とりあげ」が出来ぬに因つて、一つ喃、此のあたりで、間に合はせに、奪らう！……さて、どれにせうぞ、と思つて見入つて、視め廻いて居たがやいの、のう、殿。)

皆、——黙つた。

(殿、ふと氣紛れて出て、思懸なう懇申した驗ぢや、の、殿、望ましいは婦人どもぢや、何と上臈を奪らうかの。)

婦人たちの其の時の様子は、察して可からう。」

二十六

「奴は勝ほこつた體で、毛筋も動かぬ其の硝子面を、穴藏の底に光る朽木のやうに、仇艶を放つて胸しながら、

(喃、けれども、殿、殿たちは上臈を庇はしやらうで、懇申した效に、斷つてとはよう言はぬ。選まつしやれ、撰んで指さつしやれ、其を奪らう。……奪らう。……其を奪らう！やいの、殿。)

と捲し掛けて、

(此處には見えぬ、なれども、殿たちの妻、子、親、縁者、奴婢、指さつしやれば、立處に奪つて見せう。)

と言語道斷な事を。

とはた／＼と廂の幕が揺動いて、其のなぐれが、向う三階の蚊帳を煽つた、爾時、雨を持つた風が颯と吹いた。

(又……我を、と名告らつしやれ……殿、殿ならば殿を奪らう。)

(勝手にしろ、馬鹿な。)

と唾吐くやうに、忌々しさうに打棄つて、子爵は、くるりと戶外を向いた。

(随意にせうでは氣迷ふぞいの、はて?……)

と其の面はつけたりで、疊込んだ腹の底で聲が出る。

(さて……どれも／＼好ましい。やあ、天井、屋の棟にのさばる和郎等!孰れが望みぢや。やいの。)

と心持仰向くと、不意に何と……ぐわら／＼、ドン、ぐわツと鼠か鼯だらう、蛇も交るか、凄じく次の室を驅けて荒廻ると、ばら／＼ばら／＼と合せ目を透いて埃が落ちる。

(應、や、和郎等。埃を浴びせた、其の埃のか、つたものが欲しいと言ふかの——望みかいの。)

ばた／＼、はら／＼と、さあ、情ない、口惜いが、袖や袂を拂いた音。

(やれ羽打つ、へ、へ、小鳥のやうに羽搔を煽つ、雑魚のやうに刎ねる、へ、へ……さて、騒ぐまい、今は然で無い。然うでは無いげぢや。どの玩弄物欲しい、と私が問うたでの、前へ悦喜の雀躍ぢや、……這奴等、騒ぐまい、まだ早い。殿たち名告らずば、やがて、選らう、選取りに私が選つて奪らう!)

(勝手にして、早く退座をなさい、餘りと言へば怪しからん。無禮だ、引取れ。)

と子爵が喝した、叱つたんだ。

(催促をせずと可うござる。)

と澄まし返つて、如何にも年寄くさく口の裡で言つた、と思ふと、

(やあ、)

と不意に調子を上げた。ものを呼びつけたやうだつけ。幽に一つ、カアと聞えて、また／＼間に、水道尻から三ツの其の灯の上へかけて、棟近い處で、二三羽、四五羽、鳥が啼いた、可厭な聲だ。

(カアカアカア——)

と婆々が遣つたが、嘴も尖つたか、と思ふ、其の黒い唇から、正眞の鳥の聲を出して、

(カアカア来しやれえ！火の車で。)

と喚く、トタンに、吉原八町、寂として、廓の、地の、眞中の底から、唯一ツ、カラ／＼と湧上つたやうな車の音。陰々と響いて、——あけ方早歸りの客かも知れぬ——空へ舞上つたやうに思ふと、凄い音がして、ばツさりと何か物干の上へ落ちた。

(何だ！)

と言ふと、猛然として、ずんと立つて、堪へられぬ……で、地響で、琴の師匠がづか／＼と行つて、物干を覗いたつけ。

裸脱ぎの背に汗を垂々と流したのが、灯で幽に、首を暗夜へ突込むやうにして、

(お、稲妻が天王寺の森を走る、……何ぢや、此は、烏の死骸を何うするんぢやい。)と引摺んで来て、然も癩に障つた様子で、婆々の前へ敲きつけた。

あ、弱つた。……

其の臭氣と言つたららない。

皆、たゞ呼吸を詰めた。

婆々が、ずら／＼と其の蛆の出さうな烏の死骸を、膝の前へ、蒼い頤の下へ引附けた。」

二十七

「で、頭を下げて、熟と見ながら、

(蠅よ、蠅よ、蒼蠅よ。一つ腸の中を出され、ポーンと。——やあ、殿、土藪たち、私のが、今此處を引取る次手に、蒼蠅を一ツ申さう。ポーンと飛んで、額、頸首、背、手足、殿たちの身體にポーンと留まる、其を所望ぢや。物干へ抜いて、大空へ奪つて歸らう。名告らしやれ。蠅がたからば名告らしやれ。名告らぬと卑怯なぞ。人間は卑怯なものと思ふぞよ。笑ふぞよ……可いか、蒼蠅を忘れまい。

蠅よ、蠅よ、蒼蠅よ、ポーンと出され、おぢやつた！お、！)

一座残らず、残念ながら動揺めいた。

トふわりと起つたが、其の烏の死骸をぶら下げ、言はうやうの無い悪臭を放つて、一寸、二寸、一尺づつ、する／＼と引いた裾が、長く疊を摺つたと思ふと、はらりと觸つたかして、燭臺が、ばつたり倒れた。

其の時、捻向いて、くなく／＼と首を垂れると、摺つた後襟を、あの眞黒な嘴で、ぐい、と啣へて上げた、と思へ。……鳥のやうな、獸のやうな異體な黄色い脚を、ぬい、と端折つた、傍若無

人で。

(ボーン、ボーン、ボーン)と云ふのが、ねばくくと、重つくるしく、納豆の絲を引くやうに、而して、黠々と切れて、蒼蠅の羽音やら、奴の聲やら分らぬ。

其のまゝ、ふわりとして、翻然と上つた、物干の暗黒へ影も隠れる。

(あれ。)

と眞前に言つたはお三輪で。

(わ)と又言つた人がある。

さあ、膝で摺る、足で退く、ばたくと二階の口まで驅出したが、

(え)と引返したは誰だつけ。……蠅が背後から縫つたらしい。

物干から、

(やあ、小鳥のやうに羽打つ、雑魚のやうに刎ねる。はて、笑止ぢやの。名告れ、名告らぬか、さても卑怯な。やいの、殿たち。上臈たち。へ、へ、人間ども。ボーン、ボーン、ボーン、あれ、それく轉ぶわ、踏めるわ、這ふわ。とまつたか、たかつたか。誰ぢや、名告れ、名告らぬか、名告れ。……ボーン、)

と云ふ時、稻妻が閃めいて、遠い山を見るやうに天王寺の森が映つた。

皆唯、蠅の音がたゞ、雷のやうに人々の耳に響いた。

唯一縮みに成つた時、

(ほう)

と心着いたやうに、物干の其の聲が、

(京から人が歸つたさうな。早や夜もしらむ。然らば、身代りの婦を奪らう!……も一つ他にもある。兩の袂で持重らう。あとは背負うても、抱いても荷ぢや。やあ、殿、上臈たち、此方衆に唯遊うだぢやいの。道すがら懇申した戯ぢや。安堵さつしやれ、蠅は掌へ、ハタと擱んだ。然るにても卑怯なの、は、は、は、梅干で朝の茶まるれ、然らばぢや。)

ばつと屋上を飛ぶ音がした。

フツと見ると、夜が白んで、淺葱に成つた向うの蚊帳へ、大きな影がさしたつけ。けた、ましい悲鳴が聞えて、白地の浴衣を、扱帯も蹴出しも、だらくと血だらけの婦の姿が、蚊帳の目が裂けて出る、と行燈が眞赤に成つて、蒼い細い顔が、黒髪を被りながら黒雲の中へ、ばつたり倒れた。

下車軸を流す雨に成る。

電燈が點いたが、最う其の色は白かつた。

妖術

婆々の言つた、兩の袂の一つであらう、無理心中で女郎が一人。——
戸を開ける音、閉める音。人影が燈籠のやうに、三階で立騒いだ。
照吉は……」

と民彌は言つて、愁然とすると、梅次も察して、ほろりと泣く。

「あ、其の弟ばかりぢやない、皆の身代りに成つてくれたやうに思ふ。」

むら／＼と四邊を包んだ、鼠色の雲の中へ、すつきり浮出したやうに、薄化粧の艶な姿で、電車の中から、颯と硝子戸を抜けて、運轉手臺に顯はれた、若い女の扮装と持物で、大略其の日の天氣模様を察しられる。

日中は梅の香も女の袖も、ほんのりと暖かく、襟巻では些と逆上せるくらゐだけれど、晩に成ると、柳の風に、黒髪がひや／＼と身に染む頃。最う些と經つと、花曇りと云ふ空合ながら、まだ何うやら冬の餘波がありさうで、唯恠う薄暗い中は然もないが、處を定めず、時々墨流しのやうに亂れかゝつて、雲に雲が累なると、ちら／＼白いものでも交りさうな氣勢がする。……兩三日。

今朝は麗かに晴れて、此の分なら上野の彼岸櫻も、うつかり咲きさうなと云ふ、午頃から、急に吹出して、随分風立つたのが未だに止まぬ。午後四時頃。

今しがた一時、大路が霞に包まれたやうに成つて、洋傘はびしよ／＼する……番傘には雫もし

ないで、俾の母衣は照々と艶を持つほど、颯と一雨掛つた後で、

大空の何處か、吻と呼吸を吐く狀に吹散らして、雲切れがした様子は、其の、ま晴上りさうに見えるが、淡く濡れた日脚の根が定まらず、ふは／＼氣紛れに暗く成るから……又直きに降つて來さうにも思はれる。

すつかり兩支度で居るのもあるし、雪駄ではた／＼と通るのもある。傘を擴げて大きく肩にかけたのが、伊達に行届いた姿見よがしに、大薩摩で押して行くと、すぼめて、軽く手に提げたのは、しよんぼり濡れたも好いものを、と小唄で澄まして來る。皆足どりの、忙しさうに見えないのが、水を打つた花道で、何となく春らしい。

電車の一寸停まつたのは、日本橋通三丁目の赤い柱で。

今言つた其の運轉手臺へ、鮮麗に出た女は、南部の表つき、薄形の駒下駄に、ちらりとかゝつた雪の足袋、紅羽二重の袴捌き、柳の腰が風に靡く、と一段軽く踏んで下りようとした。

コオトは着ないで、手に、紺蛇目傘の細々と艶のあるを軽く持つ。

丁ど、其處に立つて、電車を待合はせて居たのが、舟崎と云ふ私の知己——其から聞いたのをこゝに記す。

舟崎は名を一帆と云つて、其の邊の一保險會社の一寸い、顔で勤めて居るのが、表向は社用に

つき一軒廻つて歸る分。其の實は昨夜の酒を持越しのため、四時びけの處を待兼ねて、些と早めに出た處、聊か懷中に心得あり。

一旦家へ歸つてから出直してもよし、直ぐに出掛けても怪しうはあらず、又と……誰か誘はうかなどと、不了簡を廻らしながら、何時も乗つて歸る處は忘れないで、件の三丁目にイみつ、時々、一粒ぐらるるぼつりと落ちるのを、洋傘の用意もないに、氣にもしないで、來るものは拒まず……去るものは追はずの氣構へ。上野行、淺草行、五六臺も遣過して、硝子戸越しに西洋小間ものを覗く人を透かしたり、横町へ曲るものを見送つたり、頻りに謀叛氣を起して居た。

處へ……

一目其の艶なを見ると、何故か、氣疾に、つかくつかくと飛着いて、下りる女とは反對の、車掌臺の方から、……早や動出す、鐵の棒をぐいと握つて、ひらりと乗ると、澄まして入つた。が、何のために然うしたか、自分でもよくは分らぬ。

其處に茫乎と立つた状を、女に見られまいと思つた見榮か、其とも、其の女を待合はしてでも居たやうに四邊の人に見らるゝのを憚つたか。……しかし、實はどちらでもなかつた、と渠は云ふ。

乗合ひは随分立籠んだが、何處かに、空席は、と思ふ目が、先づ何より前に映つたのは、まだ

前側から下りないで、横顔も襟も、すつきりと硝子戸越しに透通る、運轉手臺の婀娜姿。

二

誰も知つた通り、此の三丁目、中橋などは、通の中でも相の宿で、電車の出入りが餘り混雑せぬ。

停まつた時、二人三人は他にも降りたのがあつたらう。けれども、女に氣を取られて其には些とも氣がつかぬ。

乗つたのは、何の口からも一帆一人。

入ると最う、直ぐにぐいと出る。

卜前の硝子戸を外から開けて、其の女が、何と！

姿見から影を抜出したやうな風情で、引返して、車内へ入つて來たらうではないか。

而して、ぱつちりした、露のある、涼しい目を、心持俯目ながら、大きく睨いて、此方に立つ

た一帆の顔を、向うから熟と見た。

妖 術
見た、と思ふと、今立つた舊の席が、其れなり空いて居たらしい。其處へ入つて、ごたくし
た乗客の中へ島田が隠れた。

其の女は、丈長掛けて、銀の平打の後ざし、それ者も生粹と見える服装には似ない、お邸好みの、鬢水もたらしくと漆のやうに艶やかな高島田で、強く其が目に着いたので、くすんだお召縮緬も、何故か紫の佛立つ。

空いた處が一ツあつたが、女の坐つたのと同側で、一帆は些と慌しいまで、急いで腰を落した。たが。

胸、肩を揃へて、犇と詰込んだ一列の乗客に隠れて、内證で前へ乗出しても、最う女の爪先も見えなかつたが、一目見られた瞳の力は、刻み込まれたか、と鮮麗に胸に描かれて、白木屋の店頭、つゝじが急流に燃ゆるやうな友染の長襦袢のかつたのも、其の女が向うへ飛んで、逆に又硝子越しに、扱帯を解いた亂姿で、此方を差覗いて居るかと思ふ。

やがて、心着くと標示は萌黄で、此の電車は浅草行。

一帆が其の住居へ志すには、上野へ乗つて、須田町あたりで乗換へなければならなかつたに、つい本町の角をあれなり曲つて、浅草橋へ出ても、まだうか／＼。

尤も、故とはなしに、一帳場毎に氣を注げたが、女の下りた様子はない。

で、其處まで行くと、途中は既橋、藏前でも、駒形でも下りないで、屹と雷門まで、一緒に行くやうに信じられた。

何だらう、髪のかゝりが藝者でない、が、爪はづれが堅氣と見えぬ。——何だらう。

とそんな事。……中に人の數を夾んだばかり、つい同じ車に居るものを、一年、半年、立続けに、こんがらかつた苦勞でもした中のやうに種々な事を思ふ。又雲が濃く、大空に亂れ流れて、硝子窓の薄暗く成つて来たのさへ、確とは心着かぬ。

が、藏前を通る、あの名代の大煙突から、黒い山のやうに吹出す煙が、渦巻きかゝつて電車に崩るゝか、と思ふまで凄しく暗く成つた。

頸許が偶と氣に成ると、尾を曳いて、ばら／＼と玉が走る。窓の硝子を透して、雫の其の、ひやりと冷たく身に染むのを知つても、雨とは思はぬほど、實際上の空で居たのであつた。

さあ、浅草へ行くと、雷門が、鳴出したほどな其の騒動。

どさ／＼打まけるやうに雪崩れて總立ちに電車を出る、乗合のあわたしきより、仲見世は、

どつと音のするばかり、一面の薄墨へ、色を飛ばした男女の姿。

風立つ中を群つて、颯と大幅に境内から、廣小路へ散り懸る。

きちがひ日和の俄雨に、風より群集が狂ふのである。

其の紛れに、女の姿は見えず成つた。

電車の内はからりとして、水に沈んだ硝子函、車掌と運轉手は雨に恰も潜水夫の風情に見えて、

束の間は塵も留めず、——外の人の混雑は、鯨に追はれたやうな中に。——
一帆は誰よりも後れて下りた。最う一人も残らないから、女も出たには違ひない。

三

が、拍子抜けのした事は夥多しい。

ストーンと溝へ落ちたやうな心持ちで、電車を下りると、大粒ではないが、引包むやうに細かく降懸る雨を、中折で弾く精もない。

鼠の鏝をぐつたりとしながら、我慢に、吾妻橋の方も、本願寺の方も見返らないで、此處を的に來たやうに、素直に廣小路を切つて、仁王門を真正面。

濡れても判明と白い、處々むらむらと斑が立つて、雨の色が、花簪、箱狭子、輪珠數などが落ちた形に成つて、人出の混雑を思はせる、仲見世の敷石にかゝつて、傍目も觸らないで、御堂の方へ。

其處等の豆屋で、豆をばちくと焼く匂が、雨を蒸して、暖かく顔を包む。

爾時、廣小路で、電車の口から颯と打つた網の末が、一度、混雑の波に消えて、やがて、向のかはつた仲見世へ、手を細くすらくと手繰寄せられた體に、前刻の女が、肩を落して、雪か

と思ふ襟脚細く、紺蛇目傘を、姿の柳に引掛けて、艶やかにさしながら、駒下駄を軽く、棲をはらはらと些と急いで來た。

唯見ると、左側から猶豫はないで、真中へ衝と寄つて、一帆に肩を並べたのである。

なよやかな白い手を、半ば露顯に、翻然と友染の袖を擽めて、紺蛇目傘をさしかけながら、

「貴下、濡れますわ。」

と言ふ、瞳が、動いて莞爾。留南奇の薫が陽炎のやうな糠雨にしつとり籠つて、傘が透通るか、

と近増りの美しさ。

一帆の濡れた額は快よい汗に成つて、

「否、構はない、私は。」

と言つた、が此は心から素氣のない意味ではなかつた。

「だつて、召物が。」

「何、外套を着て居ます。」

と別に何の知己でもない女に、言葉を交はすのを、不思議とも思はないで、恚うして二言三言、
云ふ中にも、つい、さしかけられたまゝで五歩六歩。花の枝を手に提げて、片袖重いやうな心持
で、同じ傘の中を歩行いた。

「人が見ます。」

何うして見る處か、人脚の流るゝ中を、美しいしぶきを立てるばかり、仲店前を逆らつて御堂の路へ上るのである。

又、誰が見ないまでも、本堂からは、門をうろ抜けの見透一筋、お宮様でないのがまだしも、鏡があると、歴然と最う映らう。

「御迷惑？」

と察したやうに低聲で言つたのが、尙ほ色めいたが、些と蛇目傘を傾けた。

目隠しなど除れたかと、はつきりした心持で、

「迷惑處ぢや……然し穩でありませぬ。一人ものが随分通ります。」

と漸と苦笑した。

「では、別ツこに……」と云ふなり、拗ねた風にするりと離れた。

と思ふと、袖を斜めに、一寸隠れた状に、一帆の方へ蛇目傘ながら細りした背を見せて、其處の繪草紙屋の店を視めた。けばくしく彩つた種々の千代紙が、染むが如く雨に纏れて、中でも紅が来て、女の臉をほんのりとさせたのである。

今度は、一帆の方が其の傍へ寄るやうにして、

「何方へ行らつしやる。」

「私？……」

と傘の柄に、左手を添へた。其が重いもののやうに、姿が撓つた。

「何處へでも。」

此を聞棄てに、今は、ゆつくりと歩行き出したが、雨がふはくと思ひのまゝ、軽い風に浮立つ中に、何うやら足許もふらくと成る。

四

門の下で、後を振り返つて見た時は、何店へか寄つたか、傍へ外れたか。仲見世の人通りは雨の臙に、ちらほらとより無かつたのに、女の姿は見えなかつた。

其切り逢はぬ、とは心の裡に思はないながら、一帆は急に寂しく成つた。

妙に心も更まつて、少時何事も忘れて、御堂の階段を……あの大提灯の下を小さく上つて、嚴かな扉を……欄干に添つて、廻廊を左へ、角の擬寶珠で留まつて、何やら物と一息ついて、筆す

妖術

「素面だからな。」

と歎息するやうに獨言して、扱いて片頬を撫でた手を其のまゝ、欄干に肱をついて、遍く境内をづらりと視めた。

早いもので、最う番傘の懐手、高足駄で悠々と歩行くのがある。……然うかと思ふと、今に成つて一目散に驅出すのがある。心は種々な處へ、此から奥は、御堂の背後、世間の裏へ入る場所なれば、何の卑怯な、相合傘に後れは取らぬ、と肩の聳ゆるまで一人で氣競ふと、雨も霞んで、ヒヤ／＼と頬に觸る。一雫も酔覺の水らしく、ぞく／＼と快く胸が時めく……

「馬鹿な、其切か。いや、然うだらう。」と打棄り放す。

大提灯にはた／＼と翼の音して、雲は暗いが、紫の棟の蔭、天女も籠る廂から、鳩が二三羽、衝と出て翻々と、早や晴れかゝる銀杏の梢を矢大臣門の屋根へ飛んだ。

胸を反らして空模様を仰ぐ、豆賣りのお婆の前を、内端な足取り、裳を細く、蛇目傘を稍前下に、すら／＼と撫肩の細いは……確に。

スーと傘をすぼめて、手洗鉢へ寄つた時は、衣服の色が、美しく湛へた水に映るか、と此の欄干から遙かな心に見て取られた。……折から其の道筋には、件の女唯一人で。

水色の手巾を、はらりと媚かしく口に啣へた時、肩越しに、振仰いで、一寸廻廊の方を見上げた。のめ／＼と其處に待つて居たのが、了簡の餘り透く氣がして、見られた拍子に、ふらりと動いて、背後向きに横へ廻る。

パツパツと田舎の親仁が、掌へ吸殻を轉がして、煙管にズ／＼と脂の音。く、と何處かで鳩の聲。茜の姉も三四人、鬱金の婆様に、菜菔の阿媽も交つて、どれも口を開けて居た。

が、あ、と押魂消て、ばらりと退くと、其處の横手の開戸口から、艶麗なのが、すうと出た。本堂へ詣つたのが一廻りして、一帆の前に顯はれたのである。

すぼめた蛇目傘に手を隠して、
「お待ちなすつて？」

又、ほんのりと花の薫。
「何、些とも。……ゆつくりお參詣をなされば可い。」

「貴下こそ、前へ行らしつてお待ち下されば可うござんすのに、出張りに居らしつて、沫が冷いではありませんか。」

妖術
が、最う恠う成つては、度胸が据つて、

「だつて雨を漕つて、一人でびしょ／＼歩行けますか。」
「でも、其の方がお好きな癖に……」

と云つて、肩で故とらしくない嬌態をしながら、片手で一寸帯を壓へた。ぱちん留が少し摺つて、……薄いが膨りとある胸を、緋鹿子の下メが、八ツ口から溢れたやうに打合はせの縞子を覗く。

其の間に、きり、と挟んだ、煙管筒？ではない。象牙骨の女扇を挿して居る。
今壓へた手は、帯が弛んだのではなく、其の扇子を、一息深く挿込んだらしかつた。

五

紫の矢舁に箱迫の銀のびら／＼と云ふなら知らず、闇櫻とか聞く、暗いなかにフト忘れたやうに薄紅のちら／＼する凄いい好みに、其の高島田も似なければ、薄い駒下駄に紺蛇目傘も肖はない。が、それは天気模様で、まあ分る。けれども、今時分、扇子は餘りお儀式過ぎる。……踊の稽古の歸途なら、相應したのがあらうものを、初手から素性のをかしいのが、此で愈々不思議に成つた。

が、其も其の筈、あとで身上を聞くと、藝人だと言ふ。藝人も藝人、娘手品、と云ふのであつ

た。

思ひ懸けず、餘り變つては居たけれども、當人の女の名告るものを、怪しいの、疑はしいの、嘘言だ、と云つた處で仕方がない。まさか、とは考へるが、さて人の稼業である。此方から推着けに、あれそれとも極められないから、兎に角、不承々に、然うか、と一帆の額いたのは、しかし觀世音の廻廊の欄干に、立並んだ時ではない。御堂の裏、田圃の大金の、唯ある數寄屋造りの四疊半に、膳を並べて差向つた折からで。……

尤も事の其處へ運んだまでに、聊か氣に成る道行の途中がある。

一帆は既に、御堂の上で、其の女に、大形の紙幣を一枚、紙入から抜取られて居たのであつた。矢張練磨の手術であらう。

其時、扇子を手で壓へて、……貴下は一人で歩行く方が、

「……お好きな癖に……」

と然う云ふから、一帆は肩を揺つて、

「恠う成つちや最う構やしません。是非相合傘にして頂く。」と威すやうに云つて笑つた。

術 妖
「まあ、駄々ッ兒のやうだわね。」
と莞爾して、

「貴方、」と少し改まる。

「え。」

「あの、少々お持合はせがござんすか。」

と澄まして言ふ。一帆は聊か覺悟はして居た。

「あゝ。」

と故と鷹揚に、

「幾干ばかり。」

「十枚。」

と胸を素直にした、が、又其の姿も佳かつた。

「一寸、買物がしたいんですから。」

「お持ちなさい。」

此の時、一帆は背後に立つた田舎ものの方を振り向いた。皆、きよろり／＼と視めた。

女は、帯にも突込まず、一枚掌に入れたまゝ、黙つて、一帆に擦違つて、角の擬寶珠を廻つて、本堂正面の階段の方へ見えなく成る。

大方、仲見世へ引込したのであらう、買物をするると云へば。

さて何をするか、手間の取れる事一通りでない。

煙草も最う吸ひ飽きて、拱いてもだらしなく、ぐつたりと解ける腕組みを仕直し仕直し、がつかりと仰向いて、唇をべろ／＼と舌で嘗める親仁も、蹲んだり立つたりして、色氣のない大欠伸を、あゝとする茜の新姐も、満更雨宿りばかりとは見えなかつた。が、綺麗な姉様を待飽倦んださうで、どや／＼と横手の壇を下り懸けて、

「お待遠だんべいや。」

と、親仁が最らしい顔色して、ニヤリともしないで吐くと、女どもは哄と笑つて、線香の煙の黒い、吹上げの沫の白い、誰彼れのやうな中へ、びし／＼と入つて行く。

吃驚して、這奴等、田舎ものの風をする拘賊か、ポン引か、と思つた。軽くなつた懐中につけても、當節は油断がならぬ。

其の時分まで、同じ處に茫乎と立つて待つたのである。

六

妖術
早く下りよ、と段は其處に階を明けて斜めに待つ。自分に恥ぢて、最う其の上は待つて居られないまでに成つた。

端へ出るのさへ、後を慕つて、紙幣に引摺られるやうな負惜みの外聞があるので、角の處へも出ないで居た。何故か、がっかりして、氣が抜けて、其の横手から下りて、路を廻るのも億劫でならぬので、はじめ、ふらふらと前へ出て、元の本堂前の廻廊を廻つて、欄干について、前刻來懸けとは勢が、からりとかはつて、中折の鏝も深く、面を伏せて、其處を傳ふ風も、我ながら迎へた。迎へた。

トあの大提灯を、釣鐘が目前へぶら下つたやうに、ぎよつとして、はつと正面へ魅まれた顔を上げる、右の横手の、廣前の、片隅に綺麗に取つて、時ならぬ錦木が一本、其處へ植わつた風情に、四邊に人もなく一人立つて、傘を半開き、眞白な横顔を見せて、生際を濃く、美しく目迎へて莞爾した。

「澤山、待たせてさ。」と馴々しく云ふのが、遅く成つた意味には取れず、逆に怨んで聞える。言葉戦ひ合ふまじ、と大手を擴げて無手と寄つて、

「何處にませう。」

「どちらへでも、貴下のお宜しい處が可うござんす。」

「ぢや、行く處へ行らつしやい。」

「何うぞ。」

と最う、相合傘の支度らしい、片袖を胸に當てる、柄よりも姿が細りする。

丈がすらりと高島田で、並ぶと蛇目傘の下に對。

で、大金へ入つた時は、舟崎は大膽に、自分が傘を持つて居た。

けれども、後で氣が着くと、眞打の女太夫に、恭しくもさしかけた長柄の形で、舟崎の圖は宜しくない。

通されたのが小座敷で、前刻言つた其の四疊半。廊下を横へ通口が一寸隠れて、氣の着かぬ處に一室ある……

敷寄に出來て、天井は低かつた。疊の青さ。床柱にも名があらう……壁に掛けた籠に豌豆のふつくりと咲いた眞白な花、蔓を短かく投込みに活けたのが、窓明りに明るく灯を點したやうに見える、桃の花より一層ほんのりと部屋も暖い。

用を聞いて、圓鬘に結つた女中が、しとやかに扉を閉めて去つたあとで、舟崎は途中も汗ばんで來たのが、又恚う籠つたので、火鉢を前に控へながら、羽織を脱いだ。

其を取つて、すらりと扱いて、綺麗に疊む。

「此は憚り、否、其には。」

「まあ、好きにおさせなさいまし。」

と壁の隅へ、自分の傍へ、小膝を浮かして、さらりと遣つて、片手で手巾を捌きながら、

「眞個に些と暖か過ぎますわね。」

「私は、逆上るから尙ほ堪りません。」

「陽氣の所爲ですね。」

「否、お前さんの爲さ。」

「そんな事をおつしやると、最つと傍へ。」

と火鉢をぐい、と壓して来て、

「其のかはり働いて、些と開けて差上げませう。」

と弱々と斜にひねつた、着流しの帯のお太鼓の結目より低い處に、丁ど、背後の壁を仕切つて、

細い潛り窓の障子がある。

カタリ、と引くと、直ぐに圍ひの庭で、敷松葉を拂つたあとらしい、露の葉が芽んだやうに、

飛石が五六枚。

柳の枝折戸、四ツ目垣。

ト其の垣根へ乗越して、今フト差覗いた女の鼻筋の通つた横顔を斜違ひに、月影に映す梅の楚

の如く、大なる船の舳がぬつと見える。

「まあ、可いこと！」

と嬉しさうに、何故か仇氣ない笑顔に成つた。

七

「池があるんだわね。」

と手を支いて、壁に着いたなりで細りした頤を横にするまで下から覗いた、が、其處からは窮

屈で水は見え、忽然として舳ばかり顯はれたのが、寧ろ風情であつた。

カラ／＼と庭下駄が響く、と此處よりは一段高い、上の石疊みの土間を、約束の出であらう、

裾模様の後姿で、すらりとした藝者が通つた。

向うの座敷に、わや／＼と人聲あり。

枝折戸の外を、柳の下を、がさ／＼と箒を當てる、印半纏の圓い背が、蹲まつて、はじめから

見えて居た。

其には差構ひなく覗いた女が、藝者の姿に、密と、直ぐに障子を閉めた。

向直つた顔が、斜めに白い、其の豌豆の花に面した時、眉を開いて、熟と視た。が、瞳を返し

て、右手に高い肘掛窓の、障子の閉つたまゝ、なのを屹と見遣つた。

術 妖

咄嗟の間の艶麗な顔の動きは、たとへば口紅を衝と白粉に流して稻妻を描いた如く、媚かしく且つ鋭いもので、敵あり迫らば翡翠に化して、窓から飛んで抜けさうに見えたのである。
一帆は思はず坐り直した。
處へ、女中が膳を運んだ。

「お一ツ。」

「天氣は？」

「可鹽梅に霽りました。……些と、お熱過ぎはいたしませんか。」

「否、結構。」

「もし、貴女。」

女が、もの馴れた状で猪口を受けたのは驚かなかつたが、一ツ受けると、

「何うぞ、置いて去らして可うござんす。」と女中を起させたのは意外である。

一帆は頃刻して陶然とした。

「更めて、一杯、お知己に差上げませう。」

「極が悪うござんすね。」

「何の。然うしたお前さんか。」

と膝をぐつたり、と頭を振つて、

「失禮ですが、お住所は？」

「は、提灯よ。」

と目許の微笑。丁と、手にした猪口を落すやうに置くと、手巾ではつと口を押へて、自分でも

可笑かつたか、くすくす笑ふ。

「町名、町名、結構。」

一帆は町名と間違へた。

「否、提灯なの。」

「へい、提灯町。」

と、けろりと馬鹿氣た目とろで居る。

又笑つて、

「然うぢやありません。私の家は提灯なんです。」

「何處の？提灯？」

「観音様の階段の上の、あの、大な提灯の中が私の家です。」

「え、」と云つたが、大概察した、此の上尋ねるのは無益である。

「お名は。」

「私？名ですか。娘……」

「娘子さん。——成程違ひない、で、お年紀は？」

「年は、婆さん。」

「年は婆さん、お名は娘、住居は提灯の中でおいでなさる。……はてな、いや、分りました……が、お商賣は。」

と訊いた。

後に舟崎が語つて言ふやう——

如何に、大の男が手玉に取られたのが口惜いと言つて、親、兄、姉をこそ問はずもあれ、妙齡の娘に向つて、お商賣？は些と思切つた。

しかし、さもししいやうではあるが、其には廻廊の紙幣がある。

其の時、些と更まるやうにして答へたのが、

「私は、手品をいたします。」

近頃はたゞ活動寫眞で、小屋でも寄席でも一向入りのない處から、座敷を勤めさして頂く。「一寸嬰兒さんにお成り遊ばせ。」

思懸けない、其の御禮までに、一つ手前藝を御覽に入れる。

「お笑ひ遊ばしちや、厭ですよ。」と云ふ。

「此は拜見！」と大袈裟に開き直つて、其の實は嘘だ、と思つた。

すると、軽く膝を支いて、蒲團をすらして、すらりと向うへ、……扉の前。——此方に劣らず

杯は重ねたのに、衣の薫も冷りとした。

扇子を抜いて、疊に支いて、頭を下げたが、がつくり、と低頭れたやうに悄れて見えた。

「世渡りの爲とは申しながら……前へ御祝儀を頂いたり、」

と口籠つて、

「お恥かしう存じます。」と何と思つたか、ほろりとした。其の美しさは身に染みて、いまだ夢にも忘れぬ。

いや、其處どころか。

あの、籠の白い花を忘れまい。

すつと抜くと、掌に捧げて出て、其のまゝ、櫺子窓の障子を開けた。開ける、と中庭一面の池で、又思懸けず、船が一艘、隅田に浮いた鯨の如く、池の中を切割つて浮く。

空は晴れて、霞が渡つて、黄金のやうな半輪の月が、薄りと、淡い紫の羅の樹立の影を、星

を鏤めた大松明の如く、電燈とともに水に投げて、風の餘波は敷妙の銀の波。

ト瞻めながら、

「は」と聲が懸る、袖を絞つて、袂を肩へ、脇明白き花一片、手を亡つたか、と思ふと、非ず、縁の蔓に葉を開いて、はらりと船へ投げたのである。

唯一攫みなりけるが、船の中に落つると齊しく、礫打つた水の輪のやうに舞つて、花は、鶴の羽の如く舳にまで咲きこぼれる。

爾時きり、と、銀の無地の扇子を開いて、かざした袖の手のしなひに、ひらくと池を招くと澄透る水に映つて、ちらくちと揺めいたが、波を浮いたか、霞を落ちたか、其の大き、やがて扇ばかりな眞白な一羽の胡蝶、ふはくと船の上に顯はれて、つかず、離れず、豌豆の花に舞ふ。聴て蝶が番に成つた。

内は寂然とした。

藝者の姿は枝折戸を伸上つた。池を取廻はした廊下には、欄干越に、燈籠の數ほど、づらりと並ぶ、女中の半身。

蝶は三ツに成つた。影を沈めて六ツの花、巴に亂れ、卍と飛交ふ。

時にそよがした扇子を留めて、池を背後に眩掛窓に、疲れたやうに腰を懸ける、と同じ處に、眩をついて、呆氣に取られた一帆と、フト顔を合せて、恥ぢたる色して、扇子を其のまゝ、横に背いて、胸越しに半面を蔽うて差俯向く時、すらりと投げた裳を引いて、足袋の爪先を柔かに、こぼれた棲を寄せたのである。

フト現から覺めた時、女の姿は早やなかつた。

女中に聞くと、

「お車で、唯た今……」

逢
ふ
夜

路地にかたくと、小刻で忍びやかながら、些と蓮葉な駒下駄の音がする、と木戸際の闇に腕組みをして、ひつたり附着いて立つて居た男は、ツト霞に包まれたやうに、……其の身を引緊めた両の肩も柔かに成つて、……夜露に冷たい袖にも、ほんのりと、梅が香が通ふと思つた。

秋も半ばの初夜過ぎて、婦も最う二十五を越したのに……

其のまだうら若かつた十九の春、……男が微酔で、懇意は後廻しの日の暮方、年始に来ると、羽子板に袂を懸けて、對手欲しさうに、兩側の小松を楯に、年の内のを大事に持した三日目頃の、一寸ほつれたのも美しい、水の垂りさうな高島田で、此の裏通りの、向うの湯屋に早や燈の入つたのを、日が短かさうな、もの足りない、派手な顔して覗いて居たのが、ト其と見ると、見迎への會釋に、黙つて、目のふちをほんのりさして、羽子板を胸へ抱くや、ハツ口がひらりと翻る、襟足の雪すつきりと、背後を見せて、

「母さん、兄さんが。」

で、カタ／＼と、路地を右側の中ほどに驅込んだものだづけ。

……つい、其の時の蹺音を、今ので、ものの、音メを聞くやうに思出した。

通ふ千鳥の辻占は、行くのも、来るのも戀路である。

カタリと留まると、すつと瘦ぎすな肩を出して、ほのかに白う差覗いた顔は、婀娜に細つて、且つあはれに窶れて居る。

「可いのよ。」

「構はない？」

「え、ずん／＼お入んなされば可いのに。」

「然う呑気には参りませんよ、店に人でも居ると悪い。」

と低聲で云ふ。路地の、矢張中ほどに、ぶわりとした、便りない、灰色の暖簾を漏れて射す、

電燈が其で、此の婦の弟が、屋臺で鮎を賣つて居る……

兩側の長屋は眞暗で、いづれも寝た。

音の沈んだ、陰気な電車が、細い行抜けの大通りを、星の流る、やうに歩ると、風が颯と、柳も見えぬ暖簾が戦ぐ。……

「大丈夫よ。今頃食べに来たつて、皆近所の若衆や、お店の人たちですもの。」

「尙ほ悪い。……口が煩いから、」

「だって、構ふもんですか、知れると可恐い旦那でもありはせずさ、」

「其のかはり借金だらけだ。」

「可厭ねえ。」

と悄乎俯向く、トくつきりと襟が白い。

實は大病だったので、親許へ歸つて養生して、最う此のくらるにまでも快く成つたが、まだ、枕に着いて居る分で、抱主の方へは歸らないから、義理で、晴れては逢はれぬのである。

處を、優しい、實の母親が合點で、今夜なぞも何處か近所の、目立たない鳥屋の、奥二階あたりで密と逢つた。

「貴方がお好だから、今日はね、朝つから掛つて、新栗で、(ふくませ)を拵へて置いたのよ。……宵に誘つて下すつた時、お茶うけに上げませうと思つたけれど、これから一口あがるのに、先に立つて甘いものは不可ませんから、出さないで置きました。歸りがけに寄つて頂戴。」

「母様や小兒たちは最う寝たらう。狭い處を氣の毒だ。」

「憚り様ですよ。」

「持つて来てくれりや可いのに。」

「だつて、をかしいんですもの。……ねえ、お寄んなさいな、お内へだつて、まだ時間は可いわ。」

柳と塀と、軒燈と、土藏の壁、時々分れて歩行いたのが、此の路地口へ來ると、婦が猶豫はず、つかくと入つた後を、男は遠慮して木戸口に待つたのであつた。

「入らつしやいな、誰も居ない。」

と先へ立つて、地内に祭つた小さな稻荷堂の前を、婦は一寸拜んで通つた。

暖簾越に、男が、

「松ちゃん、前刻は。」

「や、お歸んなさいまし。」

松次郎と云ふ弟が、浴衣の上へ、紺のめくら縞の筒袖を着て、向うの臺に腰を掛けて、小鰯の鯨の酔の香、笹の葉色も散る柳で、屋臺の上に唯一ツの螢のやうな電燈と、寂しさうな睨めくらで。

「さあ、何うぞ。」

「お邪魔をしますね。」

「何ういたしました。……」

横に折れると、別についた出入り口の格子戸が……差當り誰に遠慮もなささうながら、それで

も包ましよう、細目に開けた、心遣ひ。其の癖、いそくと気が急いたか、些と粗雑な駒下駄の土間の形。

下

直ぐに上框が、階子段の下の狭い四疊半、唯一間で、向うの壁の前に爐が切つてあつて、店を仕劃の障子の隅に、帳場兼帯、小兒たちが復習をする、小机が据ゑてある。

其處に座蒲團が直してあつた。

「松ちゃん、涼しく成りましたね。」

「めつきり、何うも。」

と肩越に向けた顔は、ふツくりと、姉が二十の面影あり。

「景氣は、何うです。」

「へい、ぼつくと、と莞爾する。」

婦が二階から、みしくと、其の細い力ない、病上りにも響く身上。盆にも乗せず、内端に蓋茶碗を持つて下りて、ト其の机の上へ。……爐の向うへ、疲れたやうにくの字に坐つた。内證で、毒を五つ六つ久しぶりて相をしたので、寝て居る二階の母親の前を、一生懸命に殺した、憚る醉

の呼吸づかひ、うつすり乳の透くやうな胸へ響く。

突如手を出すのを、

「お待ちなさいよ。」

と、縋子の帯が、ぎうと云ふ、紙入を抜いて解く、と楊枝を細い指で、長く（ふくませ）に二本刺す。

「此は結構。」

「旨しくつて、え、旨しくつて、

と嬉しい笑顔で、

「中の方を、あれさ、お露のある處を。」

「中も下も、皆食べらあね。」

とひそく語らふ。

「姉さん、お茶が沸いて居ます。」

「あいよ、難有う。」

と茶棚から茶碗を取つて、男のうしろを、店の板敷へ、一段低く、浅く冷く友染のこぼれた處へ、どしとどしと踏む音。

ひらりと婦が、姿を躲して、壁際に隠れた時、暖簾を上げて、朱の如き髯面をぬいと出したは、
でつぷりと肥つた、中山高の紳士。

毛だらけなのが、此方から、よく見える、圓々とした太い手で、前ならびを一ツ引攫んで、

「鮪をつけてくれい。」と言ふ。

目は、きよろ／＼と射るが如く、奥を透かして見越すから、男は机に肘を支いて、ぐい、と障
子に胸を入れた。

「見えやしませんよ、暗いから、」と密と云つた。

店頭で、

「身體は何うかい。」

もしや／＼と舌の音を大きく立てる。ト婦は悚氣としたやうに肩を窘めた。

「へい？」

と松次郎が、斜つかひに成つて、すか／＼と握りながら、怪訝さうな目色をして、

「何うもしやしませんです。」

「うんや。」

ひちや／＼と舌舐づり。

「病氣は何うぢや聞くんぢやが。……貴様ん許に娘が居るぢやる。何へ……出て居る、……姉か。」

「へい、何うもはつきりいたしません。」

「不可んなあ。何うぢや、一寸、様子を見て遣らうか。……あ、俺は酔つては居らんど。醫者
だ。」

「あの、頭取よ……」と男の耳へ、爐を膝で越して肩を抱くやうに囁いた。——黙つて頷く。

「へい。」とばかりで松次郎はニヤリと笑ふ。

「うむ、見舞うて遣らう、俺が來たと云うてくれい。然う云や分る。何は、……居るぢやらう。」

「ですが、最う寢ましたよ。」

「寢床で可え。」

「否、母親だの、大勢寢てますから。また晝間でもお出で下さいまし、……ですがね、姉は病氣
の所爲か、きたいに他人さまにお目に懸る事を嫌ひましてね、へい。」

其時、楊枝を上へ取ると、婦のも同じ栗にさゝつて居たので、一所にすツと宙へ上る。目を見
合はせて、莞爾笑ふと、云合はせたやうに、黙つて落す、擦られたやうに身を揉んで、男の膝へ、
前髪を冷りと伏せた。

あとで路地口で別れた時は、其の店も最う閉つて居た。
婦の胸は、木戸の扉について凭れるやうに、男の背を追ひながら、ふら／＼と路地の内から鎖
したのであつた。

口で覗くか、と、ひつたりと顔を當てて、

「濟みませんがね、……私が内へ入るまで、其處に見て居て下さいました。小兒の時から、お馴
染なんですけれど、暗いとお稻荷さんの前が可恐いんですから。」

古い木戸の懸金がこはれて居るので、お長屋中約束の、手ごろの石を、ト秋風に弱く撓ふ兩手
で壓して、木戸の戸の根へひたりと着けた。

外から、密と一つ、軽く叩いて、トンと云はして、

「心細いなあ、然うされると。」

「可い事よ、貴方の力で壓せば開くのよ。」

高 棧 敷

「もし、其處は突當りではございませぬ、抜けられますよ。」
「參られますか。」

と鳥打を被つた懷手、別に用も無ささうな、ぶら／＼歩行で來た青年が振返つた。

春もたけなはと云ふ、一土曜日の日暮前の事。——此は近頃、強力松の裏あたりへ越した、何處か私立學校で一寸何か教へて居る、木崎時松と云ふのが、當なしに大通りを西へ入つて、谷町邊の坂下の窪地をぶら／＼居たのである。

其處等、屋敷町に、處々まだ取拂ひを濟まさない、卵塔場の交つたのを抜けて、がつくりと坂へ沈んだ、下り口は、急にわ／＼と賑しく、兩側には、下積の荷物を釘を放して振開けた形だが、其でも店が續いて、豆腐屋の喇叭も鳴れば、羅苧屋の湯煙もむら／＼と立つ。小兒も驅廻れば犬も走る。

が、少し行くと、最うこはれ／＼の長屋ばかり。夕春日の縁臺へ缺けた籠をがつたりと据ゑた

のが見える、と隣の軒下には、溝へ渡して附木細工の板流しが張出してある。手桶も、飯櫃もこたごた大掃除の時のやうに、穴だらけの戸障子から遮るものもないくらの。露骨に世帯が溢出して、其のまゝ、べた／＼と正札を貼れば、すぐがらくたの市が榮えよう……

其も道理か、——何も各自が嗜このんで、往來端へ勝手を曝したわけではない。此の片側は一帶に裏が見上げるほどな崖で、早や下萌の濃い煙、一面の草の叢、蛇の蜿蜒つた跡らしい茶色の路が空さまに見え隠れで、狗がのそ／＼と戸惑をしたやうに歩行く。見ても慄然とするばかり、じめ／＼と濕けて居て、處々に樹の繁つた、此の崖に押被せられて、何時が世にも、長屋々々、其の裏口には日の當る瀬はあるまい。

ために家中、戸外へ、戸外へ、と背後から小突かれて、主人は愚か、女房、小兒、其の日稼ぎに追廻はされて、内に端然として居るのなどは、見たくてもない境遇。

屋の棟へ、どろ／＼と崖の雪崩れた處には、蜜柑の皮、瀬戸物の欠片と一緒に成つて、上の墓地からであらう、卒都婆の挫折れたの、石碑の碎けたのが、赤土まじりに、草の根に落掛つて、しよぼ／＼雨の陰氣さだと、晝も蒼白く燃えさうである。

まだ凄じいのは、流に青苔の生えた總井戸より、高い處に、崖の腹へ打つつけた埃溜で。いやもう、雑多な芥が、ぞろ／＼ぐしや／＼して汚い瀧のやうに流れ懸る。

即效散、一粒丸など、古めかしい廣告が、破葛籠に下貼した體に、上へ、上へ、と路地、拔裏の透いた處を貼塞いで、此の膏藥を潜らない新らしい風も通はず。
怒る中にも、勳八等在郷軍人の門札は、頼母しや、町内鎮座の軍神である。
尤も件の名前に並べて、

(じやうぶな草鞋あり。)

と紙切に貼出したは彦左衛門殿。

軒の、其の下に、襪襦半纏を着た、鐵漿斑々な中婆さんと、襷掛けの胸を開けて、大な乳をむつと押附けながら嬰兒を抱いた、圓鬚の手絡の汚れたのと、……通懸りの一寸見によくは覺えぬが、最う一人、其も女で、三人。

悟つたやうに、晩方の青黒い崖を見て、薄茫乎と立つて居たのが、背後から呼留めて、……然うした聲を掛けたのである。

いま洪水がひいた跡と云ふではなし、路の眞中に、糠味噌桶、炭取が流留まつたわけではなけれど、露顯な、流元、竈の前、何か他所の臺所でも抜けて行くやうで、斜に渡した溝板を幾つも飛びく、とぼくとした足つきで、

「御免……」と、肚の中でつい言ひながら辿つた處。

二

前途にびたりと、可なり大構の門がある。其から左右へ黒板塀を押廻はした……其の塀の角と崖の腹が、犇とつばまつて藥研の如く、中窪みに向うが行詰まりに成つて、一ツ身震ひをして、むつくと起つて、ぬいと伸びを打つた狀に、樹の根の土を擡げて居るのが網を張つたやうに見える。下を潜つて、崖の腰を、ちよろくと水が流れる。

樹の下なれば、早や暗い。

透かして、其處は行止りだ、と思つて引返した其の途端であつた。

「難有う、」

「其の塀際を、ちよろくと水について構はずおいでなさいまし。」

と鐵漿斑な笑顔で言つた。

「しかし、他所の構内ぢやないのですか。」

「否、貴下、」と、一寸抜衣紋。

「何方へ行らつしやいますの、……と小兒を胸に揺上げるやうにしながら、少いのが下駄を引摺つて少し出た。

「何處と云つて、……ぶら／＼運動に歩行きます。急ぎはしません、引返したつて可んですよ。」
時が言ふのを聞き／＼、二人で顔を見て、両方が隣り交はした。

「え？」

「え、？」

と頷き合ふ。

「でも、行かれますかね。」

此には答へないで、

「大丈夫だね、先生方だもの、何、お前、」と鐵漿斑な若いのに言つた。

「然うねえ。」と納得したらしく、白齒が頷いて、も一ツ手を廻はして、小兒の背を抱添へる。

「行らつしやいませよ……路なんですかあね、ほ、ほ、ほ。」

と又斑、何うやら其が意地の悪さうな顔色に見えた。

且つ其の笑方が、妙に嘲ける如く聞えたので、フト氣に成つて猶豫つたのが、妙に引返しては蔑まれるやうに思つて、聊か憤然とした氣構へ。

何を！で、づか／＼。

「氣をつけておいでなさいませよ、路が悪うございますわ。」

「難有う、」

と振返つて鳥打に手を掛けたなり、其の少い優らしいのが、小兒を横に抱直して、襟を合せたのを見たが、其のまゝ、塀について崖下へづつと入つた。

上は樹の間に、草を覗いて、墓石が薄のほうけたやうに、すく／＼ある、足許は最う暗い。溝の色は眞黒で、上澄のした水が、ちら／＼と樹の根を映して流るゝともなく、たゞ揺れる。……其のへりを、畝つて穴のやうな路は、漸つと一人、崖と板塀とに、其も袂が擦れ／＼で。

塀の大な破目から、心するともなしに中を覗くと、五輪が見える、手水鉢が見える。向うに、干からびた藤棚があつて、水は濁つたが、歴とした池がある。境内の存外大い、此も寺院で、其の池の面に、大空の雲がかゝつた。

少し行く、と向うが又突當りに成りさうな、崖がぐるり取巻いた、……よく言ふたとへながら播鉢の底のやうな處らしい。

直きに、其も抜けられさう。で、別に仔細はない。女同士が囁いたのも、扱は、此方が念を入れたために、一寸答へに淀んだので、實は矢張り表向きの抜路ではなく、便宜のために、居まはりのものばかり覺えた拔裏などであらうも知れぬ。

氣安く、又懐手のぶらりと成つて、板塀の破目、透穴から、五ツばかり寺の池を數へて行つた

が、一本、樹の大きなのを向うへ抜けると、崖が引包んだ……其の突當りのやうな上の、つツと立樹の梢を離れた、遙な空に、上町の家の二階があつて、欄干もともに目に附いた。けれども其は二階ではなかつた。

が、三階四階と云ふほど高い……崖の頂邊から、棧橋の如く、宙へ釣つた平家なのである。

三

勾配も随分峻しい、一なだれの草の中から、足代の如く煤びた柱を、すく／＼と組んで築上げて、崖からはまるで縁の離れた中途で、其の欄干づきの一座敷を、樹の上に支へたが、眞仰向きに成つて見上げるばかり。で、恰も橋の枕、また芝居の舞臺の奈落とか云ふものめく。

芝居と云ふにぞ、棧敷を一間、空に張出した形である。

襖の様は奥深く、最う夜の色も迫つたらう、遠く且つ暗くて見えぬ。

障子は一枚もなく、開放して、廻り縁の總欄干。

時がイんだ處からは、其の横手が見えて、一方は壁の、其の色も眞暗で、足代めいた橋柱は固より、透いて見える舟底の如き天井も、件の縁も、一體に煤け古びて、欄干の小間も其方此方ばらばらに抜けて居る。

背後正面は、此なる寺の屋根さへ、下界一片の瓦にして、四谷の半分赤坂かけて、何處まで見通しか計り知られぬ。

からりと廣いから、氣の所爲もあらうけれども、なか／＼八疊六疊と云ふ座敷でない、十五疊二十疊、まだあらうとも思はれた。

下から見えるのは、唯其の一室ばかりであつた。いづれ上町通りの門口には、——京が見える、大阪が見える、と斜めに貸家札を貼つて、雑作がはりに、家相傳の望遠鏡を賣りでもしよう。

が、土蜘蛛の脊と蝦蟇の頭を礎にしたやうな、床下の柱を見ても、十年來の貸家が知れる。

と時は目を睜つて舌を卷いた。が、ぶらりと歩行いて、其の棧敷の正面へ廻ると、やあ／＼、空屋處か。

丁ど其の間に、二抱へもありさうな、何の樹か、春早く葉の茂つたのが、崖の裾、やがて、溝越しに行くものの手の届きさうな處に、づしりとあつて、すツくと高い。

此の樹の蔓つた枝と、向ひ合つた廻り縁の角の柱と、さしわたしに遮られて、横手からは見えなかつただらう。

敷棧高
其の縁の曲角に、夕視めと云ふ、つれ／＼姿で、正面の欄干に凭懸つた、繪の拔出したらしい婦が居た。

が、東、西、夕日、宵月の景色を視める風情ではない。

此方へ、雪のやうな襟脚と、すらりとした艶やかな鬘を向けた、すねた柳の坐りやう。風にも堪へまい、細りした瀧縮の、お召縮緬であらう、黒緇子の襟と其の長い襟脚をすつきりと水際立てたは、濃い浅葱、あとで心着くと、遠目だのに、——其の半襟の無地だったのも不思議なほど判然見えた。

髪も浅葱の手絡を捲いて、三ツ輪と云ふ、婀娜に媚かしい結方して、紺地に白で獨鈷の入つた、博多らしい丸帯を、浅葱絞りの背負上げはづれに、がツくりと弛く結んだ。結目は小間の横木に隠れたが、上についた袖が颯と雲に沈んだやうに空へ掛つて、うしろへ反らして肱をついた、ハツ口深き緋縮緬は、居坐居の裾にも散つて、黄昏かゝる崖の上も、ほんのり明るく、薄紫の霞を彩る。

時は茫然とした。

空なる婦も、暫時、身動きもしないで、熟として、部屋の向の、突當りの黒ずんだ廣い壁を見て居たのである。

ちらりと白い爪尖で、紅の襟を、崩るゝ如く、横坐りに、もう一息、欄干に撓ふばかり、たをやかな其の脊を凭たす、と思はず、青年が、板扉に殆ど魂の抜けた身體を寄掛からせた時であつ

た。

横手の縁側を前後に、二人、二三尺間を置いて、又是は……羽先の黒い白鳩が、ひらくと木隠れに梢を潜るやうに來たのは、對の白衣に墨染の腰法衣を裾短かく着た、刺たてらしい、頭のあをくくと藍色して眞圓な、色の白い、揃つて目鼻立の愛くるしい、いづれも年紀は十三四。

四

お小僧らしい其の二人が、摺足かと思ふ恭しい運びで廊下を渡つて……今正面へ來たのを見ると、二人とも紙を折つて、びたりと口蓋を掛けて居た。

で、いづれ飲料か何ぞであらう、兩方が、齊しく小さな器を手に捧げて居て、唯見るとやがて、婦の前へ順に並べて、つゝと腰衣を黒く、姿を白く、板を這つて一様に跪いた。

其の時、何か差心得たものであらう、二人とも、ちよろゝと立つて、欄干へ出て、手を支いて、半身中空へ乗出すやうな形で此方を瞰下ろす。白衣の下に薄紅の颯と透通つて見えたのは、婦の間近に成つたため、其の長襦袢が照映えて、二人の膚に染みたやうであつたが、よく見ると羅に襲ねたので、お小僧達は、目許口許、見紛ふ方なき女の童なのである。

不審さに、渠は水を浴びたやうにひやりとして、背後を見ると、凭懸つた板扉の節穴に、背後

なる寺院の其の境内の池が、黄昏の色に染み出したやうに急に大きも廣さも増して、ふわりと浮いて、ひた／＼と水が背中を浸しさうに見えて、而して波を立てて、緋鯉がすらく／＼と行く。其の影も、燐火のやうに凄かつた。頭の上で／＼と沈んだ陰氣な音がする。

「樵夫だ。」
と、聲を出して呟いた。
婦に見惚れて、恍惚と成つて忘れて居たらう、崖に近い、其の大樹の梢高い處で、鋸を使ふ氣勢である。

枝さし繁りたれば、葉隠れて鳥の蹲つた影も見えぬが、／＼／＼／＼として幹の骨髓に響く。
と心着けば、向うの欄干の角の柱に生えた、やどり木の枝のやうな梢の一處、特に縁を籠めて暗い中に、風のない日だつたが、ざわ／＼とそよいで、かつらを捲く體に、木の葉の渦巻くのがあり／＼と認められる。……

「これは。」
羽織の襟、帯を懸けて、袖の皺にもばら／＼と、少しづつ、少しづつ、霜が下りたやうに木屑

が落溜つて居たのである。且つ其の色が生々として朱い。
時は、慌しく、總身に震揺をくれて、袂をはた／＼と拂ひながら、樹の下を摺抜けた。

雨も鎗も厭はぬが、暮に及んで、恚う鋸を使ふ處では、見込んだ仕事、半途で止すまい。一息と云ふ仕上げで、今にも梁のやうな大枝が、地響を打つて落つるは一定。
「疾く出よう、何だか可訝い。」

其でも、餘りの事の、媚かしく美しいのに、骨筋もなへるばかり、蕩々と成つて、徜徉ひながら、突當りへついて曲ると、思の外谷は浅い。
向うは低い處、又墓場で、上に、町へ出るだら／＼坂の、ぼき／＼と埒を結つたのが橋のやうに斜めに渡つて、寂寞したが人家も見える。

此處を取廻した崖は、裙が其の墓場で盡きる。谷の出口が懷を廣く、箕の形に開いて居た。墓場と崖の裙を境の處に、潰した井戸のあとと思ふばかりの水溜があつて、其が浸むか、一面にじと／＼と、底光がするかと土が濡れた。上には四方から樹が被さる。

渠が傳つて來た小流は、幽ながら、下から湧くか、崖を絞つて滴るか、此の水溜の、浸出す水の捌口らしい。
其處に朦朧として一人、大川端に暮残つた狀して、頬被した漢が居た。手足は動くが、潮に揺

れる杭を打つた形である。

半股引の裾端折りした脚に近く、水溜のへりに、やがて腰の上まで届く、網を蓋した大形の古い畚。繪にした狸の八疊敷ばかりなのを引着けて、竹棹を横へたのを、釣の歸途が洗足するか、と思ふと、違ふ。

手にしたのは一本の熊手。柄短かに片手に取つた、片脇に手頃な一個の箕を抱いた。

箕をひたと草に着けて、腰の骨で附着けながら、件の熊手で、崖の腹を逆さ扱きに、すらくと搔落して、其の箕でうけて、溜ると、熊手をさし置いて、両手で取つて俯向けにして、下の畚の口へあけ落す時、さつと云ふ……滅入つた、沈んだ、冥途を吹く風のやうな音がして、心持冷として生腥い。

落葉搔くの、畚は可怪。

一寸見る間に、同じ事を三度した。

其の差置く時、熊手は崖の草へしよぼりと沈んだ形に成る、……すつと柄を取つて、ちよつかいの手つきで搔く。ト最う箕が小脇に引着けられる。かさくと引落す、直ぐに溜るか、畚の口へ、ざあ、とあける。トさつと云ふ可厭な音。

仕事を急ぐのではない。向返るのも大儀らしく、だらけて、もそりと行るが、馴れ切つたもの

らしい。何時も同一呼吸で、器械の如くに體が動く……恰も緩かな水車に仕掛けた機關の案山子のやうな。

山田小田、目も遙かな、里遠い山の峽に、影唯一つ秋の暮れ行く思がする。

「親仁さん。」

と背後に寄つて、渠は訊ねた……言を交へて、あはよくば聞きたい事があつたのである、——此の界限のものと見た。

「お精が出ますね。」

「うゝ。」

と頬被りの深い裡に、惰けた、面倒くささうな聲を出したばかり。

熊手を取つて、さらくと草を扱く。

「何をして居なさるんだね。」

「掘出すだよ。」

と又一搔。

近間で聞くと、是さへ可忌はしい、鱗に觸るやうな草摺れの齒の音なり。「掘るんですか、何をね。」

「毎日の食を求漁るだよ。」
知れた事を、と投げた言語。

「食べるものなんですか。」

「賣りもするだ。……」

「松露ぢやなし、一體何です。」

「問はんが可え、聞いたら魂消るぞ。」

と箕にうけるのが、ぞろ／＼と鳴る。

時は、そんな事はついたりで、構はぬのである。

「然う言はれる、と尙ほ聞きたいね、親仁さん。」

「何だてえ。」

「其處の崖の上にある……」

と言ふことも身を轉じて、指さうとしたが、美女の姿は木隠れに成つて居た。

虹の消えたやうな心地がしながら、

「あの、家は、……あれは何です。」

「たゞで貸す、名代の空屋だ、誰も住まねえ。」

「違ふよ、人が住んで居ます。」

「や、」

と云ふと、箕をさつとあけた處、——ぐるりと向直つて、屹と見た、其の眼の凄さ。

何心なく立つたのが、思はずじり／＼と後に退つた。

「主あ！見たか？」

聲が出なんだ。

「……………」

「む、其を見たら、是も見せう。」

と水溜に搔踞ひ状、握拳で丁と壓へて、番を、ぐら／＼と揺ると思へ。

網を分けて、むら／＼と煙のやうにのたくつたは、幾百條とも數知れぬ、細い蛇の鎌首であつ

た。

呼吸がつまつて、崖へ取つて投げられた如くに突當ると、弓形に身體とともに反曲つて、舊來

た塀際へ驅出した。

徑を塞いで、眞赤な雲。恰も瀧の如くにかゝるは木屑で。早鐘を撞く耳の底を抉つて、こ／＼と

う／＼と云ふ。

木の葉は空にぐるぐると大渦に渦卷いた。

「わつ、」

と叫ぶと、頭から目口へ浴びつつ、めくら突きに、其の谷の窪を飛出す。と、木樵が落ちたか、枝が下りたか、背後に凄じい音がした。

今は癒えたが、其の後、しばらく目を悩んだ。其のあと目を経て消えたが、木屑を浴びた羽織の其處此處、宛然血に染みて居たのであつた。

池の聲

「……(かた／＼かた、かた／＼かた)あ、久しいもんだが、生れついたしやうがにや、(兩方)とも鳴けめえス。(かた／＼かた)ト遣つた處は、何の事はねえ、居候が戸を開ける音だぜ。」
ト斜に構へて、咽喉をぶく／＼、で目玉をきよろりとして居る。

「鮑が三ツとも聞えますかね。」

と、すらりとしたのが、口をばくり、これで莞爾した思入なり。

「誰だ、や、緋鯉か。恚う、久濶だね。だが、何だぜ、緋鯉を緋鯉と呼ぶに不思議はねえが、水も濁ると色氣がねえ、此處は緋鯉ちゃん、と行く處だ、何うだね、おいらん。」

「まあ、可厭だ。」

と鰭でひら／＼と嬌態をする。

「何でも店つきはお前に限る。それ、藤の花の暖簾を分けて、其の裃襦がひらりと見えると、立所に、ポンとお手が鳴らうと云ふもんだ。まあ、づつと寄んねえ。」

「あいよ。」

「扱と……先づ以てお美しい。」

「おや、蛙鳴さん、難有うよ。」

「はてな、何か耳觸りな事を云ふぜ。」

「だつて、お定りの表徳ぢやないか。ねえ、おまへ、おや、矢張りあめいと聞えるさうだよ。」

「蛙鳴もんだと言はねえばかりよ、畜生め。恚う然う言や、何だ、あれは？ 俺が三つなら三ひよこひよこで、それ、古の歌にもあるが、鮑が三つとは聞かねえ句だ。」

「(かた／＼かた)さね、磯の鮑が三つのやうに聞えるからさ。」

と又すらりと泳ぐ。

「はあ、強藥の三個弾、ポン／＼ポンと来る奴か、ふん、いや、我ながら應へるわえ。」

「氣が利かないぢやないか。同じお長屋の兄さんだ。不景氣な鼻唄なんかそつて居ないで、時節柄だよ、假宅とでもお鳴きなさいなね。」

「成程、(かりたく、かりたく)か。待ちねえ。俺のやうな曾我中村が、(かりたく)と、それ遣つた日にや、質屋の番公を口説くやうだぜ。納まらねえ。が、(全く、借りたく借りたし)だ。」

「眞個だわねえ、昨日今日の事でもないが、お互に酷い目に逢つたぢやないかね。」

「娑婆轉倒と云ふ御難ス、辛くして生命助かりと云ふ中にも、ゑごくつて煙いんだ。ぐわつとポンプで搔廻されて、然らぬだにの水道尻が、一面泥水と成つた時は、世界の搔玉子と云ふ料理鹽

梅。いや、さすがの此の方、目も口も開くもんぢやねえ。五體渾沌として海鼠の如し。車前草の下に、ト片息に成つて、ぶら／＼と風に煽られた處は、六月目に墮胎された賽の河原と云ふ形よ。密とでも天上を見ようもんなら、凡そ、俺くらゐな火の粉な、——え、緋鯉ちゃん、お前ほどあらうと云ふ、炎が交つて、めら／＼、ばら／＼と引被る。」

「よしとおくれ、聞いても半襟が震へるわね。」

と鱧を細かに、ぶる／＼／＼。

「羹に懲りて鱧に吹くだ。緋鯉ちゃん、お前の前で言つちや悪いが、當座は最う、ちらりと見ると、ぎよつとした。赤い手絡も、緋縮緬も、色氣處の沙汰ぢやねえ。」

「眞個にね、賀の祝のお婆さん以來、一時は私だつて、此のさ、上被が脱ぎたかつたよ。」

「へん、うまく云ふぜ。頼むよ、おいらん。お前に然うした實があらば、蛙鳴さん、恚うした鳴音は出さぬだ。先づ可さ、假宅もづらりと並んで、四つ目垣の青々とした處へ、すつきりと植込の茂を見せて、ちら／＼石燈籠の點いた處は、二三十年以來さ。追付け恚う、簾の蔭に、薄い襦褌でも透いて見ろ、豚だつて羊に成らあ。些とは女も見直すぜ。俺が夥間の枝蛙ぢやねえが、ひよいと襦子窓に突出した柳の枝へでも上つて見てえ、こゝで濡の幕の雨を呼ぶだ。だが最う當分、紅い襦褌はあやまるな、氣がさして何うも成らねえ。恚う氣にしなさんなよ、お前は燃え立つや

うだつて、水の中に居るんだから、其處は安心だが、あの前兆せの媼様は何うだ、今思つても物凄いで……なあ。」

「何だつて、又、眞赤な服装をさせたんだらうね。」

「其處は人間のお儀式だ。何も、何うの恚うのつて、理窟はねえ。其が自然の約束事だ。誰が悪いと云ふのぢやねえ。些と前の、あの日本橋の渡り初めをした媼様を見ねえ。矢張赤い頭巾だったが、此の方は、それ、どしや降りと來たから火の元は靜まつた。廓の媼様が時は、からつとした天氣の處へ、櫻の植ゑたてと云ふのに、可恐い南風ぢやねえか。其の中をお前、頭巾から、足袋、衣服に帶よ、羽織まで、いづれも裁下しと來て、めら／＼、躑躅に火熨斗を當てたやうな、何の事はない縫ぐるみの、火焰の精靈。此がお前、頭巾の下から見々光る、白髪をすらく、太杖で、何と、五丁町をぐる／＼廻つて、仲の町から、ぱつと大門口、五十間に、ひよいと顔を出したんだから凄からうぢやねえか。」

「然うだつたつてねえ。私は最う、皆があれ／＼緋婆々が驅廻るつて泡沫をお立てだから、最う可恐くつてさ。吉野町の寮に居る、いけすな、そらね、可愛らしい、あの何時も公園の柵を一本根こぎに透して置いて、お轉婆に跳込む娘兒だあね。お馴染が來て、手を叩いて呼んでおくれの處だつたけれど、其れ處ぢやないんだもの。藻を被いで、突伏して、わな／＼震へて居たんだが

ね。驅けたつてね。……賀の祝と云へばお前さん、八十だらう、そりや祝をするくらゐ、達者なお婆さんぢやあらうけれど、何だつて、又やけに……」

「おつと！禁句だ、氣障を云ふめえ。」

「まあさ、何だつて年寄りが驅けたんだらう。おまけにお前さん、消防夫が火事装束で、鐵棒をついて、大勢警固にいたんだもの。其も前兆だと云ふけれど、其の時は、伊達のお練さ、行列ぢやないか。お前驅揃へて花やかにいッ、……チャアンチャ、チャアンチャ、チャアンチャンチャンと行く處を、驅出しちや約束が違ふだらうにさ。」

「其處が、矢張り約束だと云ふ事よ。總體、今度の道中は、第一何よ、御當人のお婆さんが、何（御時節柄、然うでもあるまいよのう）で、氣が進まねえ。處を、傍のものが合點しねえで、やいやいと噓し立てて、緋羅紗、緋天鵝絨で、赤い端緒の雪踏まで穿かせたわ。南無阿彌陀佛と、それ五文字に推出して、江戸町、京町、揚屋町と、二軒、三軒づつ、身寄、親類、懇意な茶屋小屋へ、一軒々々顔出しをさしたらう。廓内ばかりだつて、曲り廻り可成りの道、其處は年寄だ、氣が短けえ、根が進まねえ處へ持つて来て、やい／＼云ふ、わあく／＼騒ぐ。二階三階、途中ながら、居續けの下の部が交つて一杯の見物だ。何が、お前、水道尻の方へ來た時なんざ、検査場から病人が、一齊に顔を出すぢやねえか。あらう事か、物干は申すに及ばず、何を間違へたか、大屋根

へ出て見て居たのがあら、可恐い。今にして思へばス、それ火事だ、と焼出した時と同じ様子よ。火のやうな南風は吹く、日はかん／＼當る、朝から出だして丁ど焼出したアノ午の刻、正午だ。陽氣と人だかりにくわつと逆上せて、婆さん、汗みづくに目が据つた！ さあ、腰もしやつきり張る、氣が引釣る、早く顔出しの挨拶を済まさうと、それ、杖を鳴らして、すた／＼驅はじめたと思へさねえ。」

「あ、ねえ。」

「處がさ、此が何だよ、……何も、其の賀の祝の隠居どのが一切自分の了簡で、何を何うしたと云ふんぢやねえ、……緋鯉ぢやん。」

と一つかた／＼かた、と鳴いて、ぐつと氣を沈める。

「何うしたのさ、一寸？」

ぱくりと、此も内證口。

「何うしたつて、お前、高い聲ぢや言へねえが、昔から廓を狙つて、ファイと出て來る婆あ様！」

「まあ、どんなさ。」

「どんなつて、俺たちにや形は見えねえ。が、何だよ、馬が緋の法衣を着た形で、小さなものだよ。烏の翼を船にして飛ぶんだつてな。賀の祝の隠居さまは、たゞ衣服の色で云ふんだが、

此こそ眞個の火婆々と云ふ……一人ぢやねえ、諸國方々に大分居る。が、今度来たのは淺間ヶ嶽の岩蔭から灰を捲いて来た魔ものだ。其がね、此の要害で狙つて居て、それ、時が来た、と驕然、賀の祝ひの身體へ乗移つて、焼くぞ、焼くぞ、(かた／＼かた。かた／＼かた)……」

と話が急込むと、つい本音で鳴いて、

「生命は助ける、と可恐しや、驅廻つた。」

「何かい、まあ、其の婆さんは、可厭だねえ。何處で狙つて居たんだねえ。お前さん、矢張り火事の火元の家かね。」

「うんや、大音寺前のな、當時はなくなつたやうだが、あの、石橋の近所よ、大鳥様の直き傍だ。すつかり家並は變つたが、唯た一軒、昔から軒の崩れた、廂の裂けた、そしてお前、潛戸の柱から破壁へ、引搦んで、一面に枸杞の生えた家があらあ。焼残つたぜ、彼處等。其の枸杞の葉に宿を取つて、枸杞の實が好きで婆さんでな、ホツ／＼食べながら逗留をして居たものよ。可恐しい。魔物の業で驅出させるんだもの、賀の祝の隠居どの、大門から、めらり五十間へ出た時は身體が二三尺空天へ飛上つた。何と、當人が走るんだから、警固についた消防夫徒が、のし／＼練つちや居られめえ、ぞろ／＼續いた見物ぐるみ、さつさと急足に成つたと思へ、それ、あの音だ。」

「私はもう、雷様より可恐かつた。」

と鰯をすぼめる。

「なあ、凄かつたぜ。早調子が迫話つて、鐘で叩く責太鼓だ。チャンカン、チャンカン、チャンカン、チャンカン。(かた／＼かた)と鳴く。」

「あ、悚然とした所爲か、ひつそりしたよ。ねえ、お前さん、今のお前さんの聲は一寸色氣があつたよ。ね、焼出された仲の町の藝者衆が、當分、吉野町、千束町、橋場邊の裏長屋に手鍋提げたり水仕事さ、前垂がけの夕化粧で、土手を檢番へ通つて、假宅で、音メを聞かせて、歸りにや火の車に乗るでもない、と微酔の夜道さね。……御近所が堅氣だからつて、氣を兼ねて、そつと格子戸を……ねえ。」

「うむ、(かた／＼かた)か、(かた／＼かた)、いや、此奴は可い。(かた／＼かた)、と、お、星も曇つた。異に慙う、粹な世界に成りかけたぜ。(かた／＼かた)、假宅次手だ、一層八朔にや臙脂なし鐵漿つけた半元服で、テテテンテン、はや八朔の白無垢や、雪白妙……と遣つてくれ。」

「お待ちよう、櫻を植ゑて焼けたもの、又お前雪白妙で、水が出ちや大變だあね。」

「其處は此の方お構ひなし、酒亞たるもんだス。」

「へん、おつしやる。……お前だつて夕立にや面を出して洗はせらあ。眞個だ、……些と氣を換へて、え、おい、久しぶりで、(かた／＼かた)、青田見なましても聞かしてくんねえ。此方あ本調子で聞かせるぜ。(かた／＼かた、来たこらさ、かた／＼かた、くらら、くらら、くらら、くらら、くつくつ、くらららら)。ホイひとりでに浮いて來ら。(くららら、くツ、くらららら)。此奴、(苦は樂のたね。)とでも聞えやしねえか、何うだ、緋鯉おいらん、おい、姉」

と云つても返事がないし、きよろりと見ると……道理こそ暗の夜の池のふちへ、岸駒の虎と云ふ形で、焼出されの猫が一匹。火に怯えたため血迷うて、飼主が泣いて騒ぐのも耳に入らず……晝間は潜んで、今時分に成ると漁りに出る。骨と皮ばかりに瘦せて、血の筋張つた目ばかり、ぎらぎらと光る。夏産の、豫ていかもの食が、此の場合、で飛んだ物凄き代ものなれば、

「あつ、」と云つて目をぱち／＼、ぶる／＼と震へながら、

「(かた／＼かた)……」

ト小さな聲で、

「洒落ぢやねえ。へん、違えねえ。」

(寺島製本)

昭和十六年六月二十五日印刷
昭和十六年六月三十日發行

鏡花全集第十三卷

著者	泉 鏡太郎	東京市神田區一ツ橋二丁目三番地
發行者	岩波 茂雄	東京市下谷區二長町一番地
印刷者	井上 源之丞	東京市下谷區二長町一番地
印刷所	凸版印刷株式會社	東京市神田區一ツ橋二丁目三番地
發行所	岩波書店	東京市神田區一ツ橋二丁目三番地

電話(33)一八七・一八八番
九段(33)一八九・一八〇番
振替口座東京七四四一六番

配給元 東京市神田區淡路町二丁目九番地 日本出版配給株式會社

東京府規格外可資紙第一七三號



798

167

